

面報風俗奇譚

目で見る変態風俗絵巻

昭和35年9月15日発行（毎月一回15日発行）通巻第4号

面報風俗奇譚

4

目で見る変態風俗絵巻

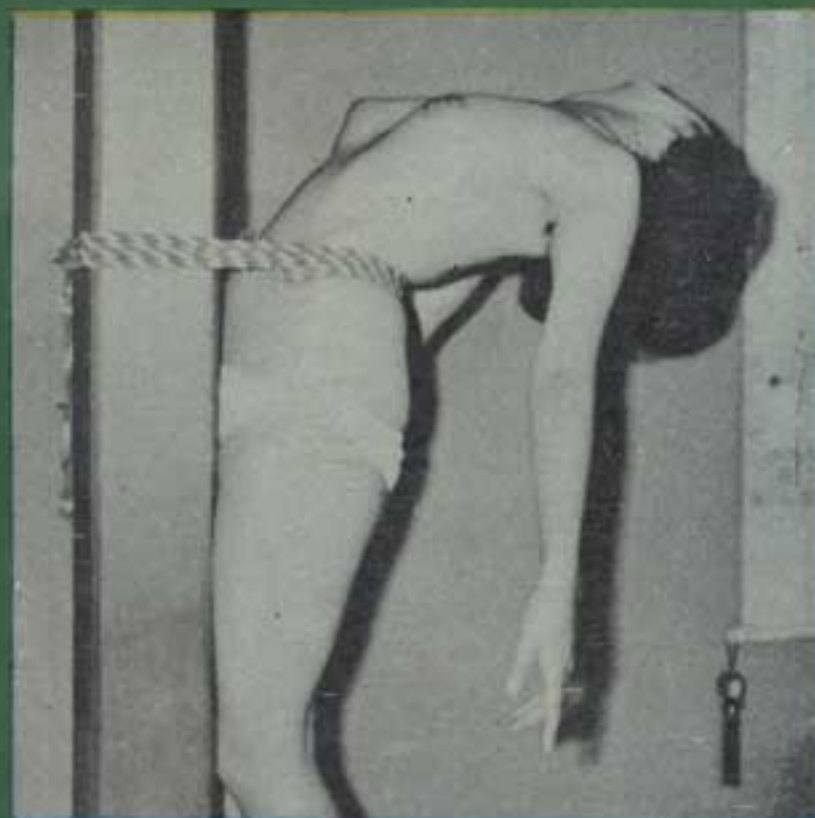
第4集

緊縛女体新作写真展
凄惨残酷絵物語集



面報風俗奇譚 ④

昭和35年9月15日発行（毎月一回15日発行）通巻第4号



定価 1 8 0 円



画報・風俗奇譚 第4集

定価 一八〇円

昭和三十五年九月 五日印刷
昭和三十五年九月十五日発行

編集発行人 高倉一
印刷所 刊行会印刷部

発行所 文獻資料刊行会
東京都千代田区神田神保町一の三五
電話(291)二四三〇番

五輪石塔の前で



緑の庭の片隅の 石の塔は五輪重ね その前に 静けられた
まきの裸女ひとり ひっそりすわって 何を待つ 風のま
えの静けさでなく あり 悦慮を辿る 静寂のひととき

水辺の小屋で

縛られただけでなく 水につけられ
残虐なことが待っているのだろうか
めしずかに身を沈めていく ただ
女は 無心に水を見つ
そのことだけのために



緊縛落花

縛られたまま 放り出されて それも 仰向けに しか
も逆さに 投げ出されて この苦しい姿勢のなかから
こんこんと湧きいでる 不思議な感覚 女の生理のナゾ



すだれ戸を背に

すだれ戸をとおして 夏の風が 吹きこむが 乳房をぐつ
と縛りあげられて 女は 白い肌いちめんに 汗をふかせ
官能を燃やしている 季節の嵯峨風物詩だ！





コルセットが女の肉体をいじめる



画報・風俗奇譚 第4集 目次

色刷写真

〈第1グラビア〉

五輪石塔の前で	三
水辺の小屋で	四
緊縛落花生	五
すだれ戸を背に	六
水車に縛られて	一五
水に縛られて	一六
露台上の受囚	一八
岩の上の女	二〇
女のカルテッ	二二
ハロソク	二四
責め	二六

〈第2グラビア〉

青い無残絵巻	二七
岩に寝かされて	二九
柱を抱かされて	三一
男をいじめ	三二
はなやかな腰紐	三四
とらえられた裸女	三六
二人とも縛られて	三八
変わったエビ	四〇
髪の毛し	四二

〈第3グラビア〉

片足宙づり	五一
縛られた肉づ	五二
お灸責め	五三
同性悦入	五五
肌に魚い	五八
活の魚お仕置	六〇
大の魚お仕置	六二
縄の魚お仕置	六四
と	六六

口絵

白肌針責め・納屋の中・宙づり	田上恵子(四三)
焼きゴテを乳房に・古屋敷の幽囚	江馬美久(四六)
海底イカリしぼり・帆綱折り	小田利美(四八)

世界名作秘画

・サルゲナバルの死・ルクレチアの死
・鞭打ち木版画・牢番とムチ
・美人製造会社・黄金の籠……(七二)

誌上展覧会

悪徳の栄え	マルキ・ド・サド(八六)
町の野獣たち	田上恵子(八六)
野盗と女たち	川島勇男(六九)
	江馬美久(六九)
	小田利美(二〇六)

女体緊縛考	湯浅重二(八三)
-------	----------

リチャード・ミューラーのグロテスク画集

(六七)

〈世界残酷物語〉	
ソ連兵20万を悩ました男	ロバート・ヘンドリック(九二)
ベン・ホーガンの力業	マーチン・ミラー(九四)
人質にされた金髪の美女	アラン・ストローム(二〇二)
地獄の戦士	ジョエル・リッター(二〇四)

裸女緊縛30態



美しくするためか？ いじめるためか？

水車に縛られて

水車にハリツケにされた女は 水車が回れば そのままグルリと回転する からだがひっくり返るからといって 性欲まで倒錯するのだろうか



水車と女

水車の回るは 水まかせ
責められる女は 水車まかせ
さてここに花ひらく 嗜虐のひととき
時の流れと 水の流れと
そして 人の身のゆくえ定めぬ行く末





水責め

うしろ手に縛り 抱き上げて 水中につける この
残酷なお仕置きは 女が気絶するまで 続けられる





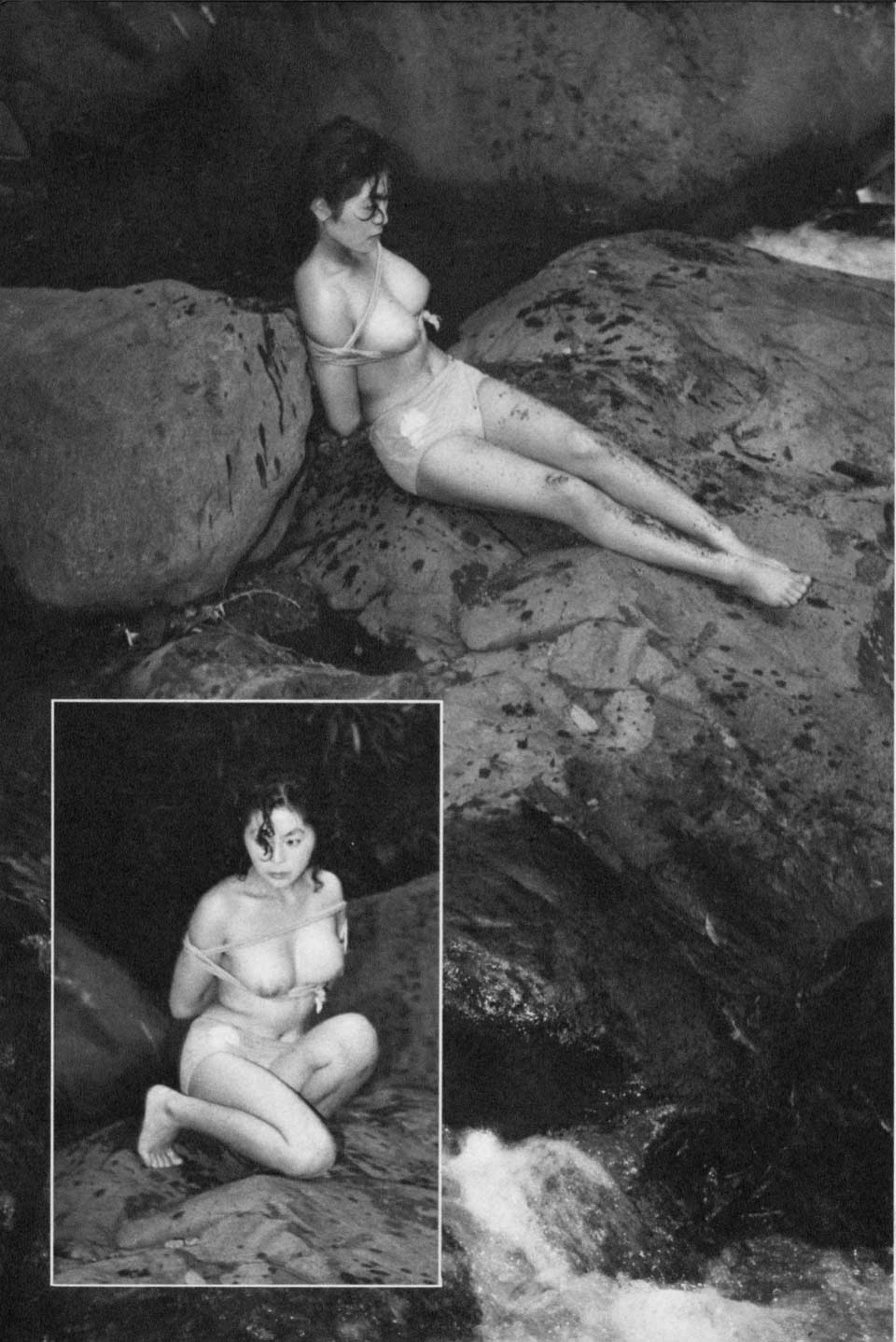
露台の囚女

人気のない山の宿のバルコニーに ひつそりとおかれた緊縛の裸女 暮れていく山気のなかで ひえびえと息づいている

縛 受 上 岩

清冽な溪流のなかの 大きな岩の上に
縛られた女が ひっそりという この
まま夜を越せば 山の冷氣と 小さな
虫の群れに 責められ 血をすわれて
あわれ 白い肌に痛ましい傷跡が浅る





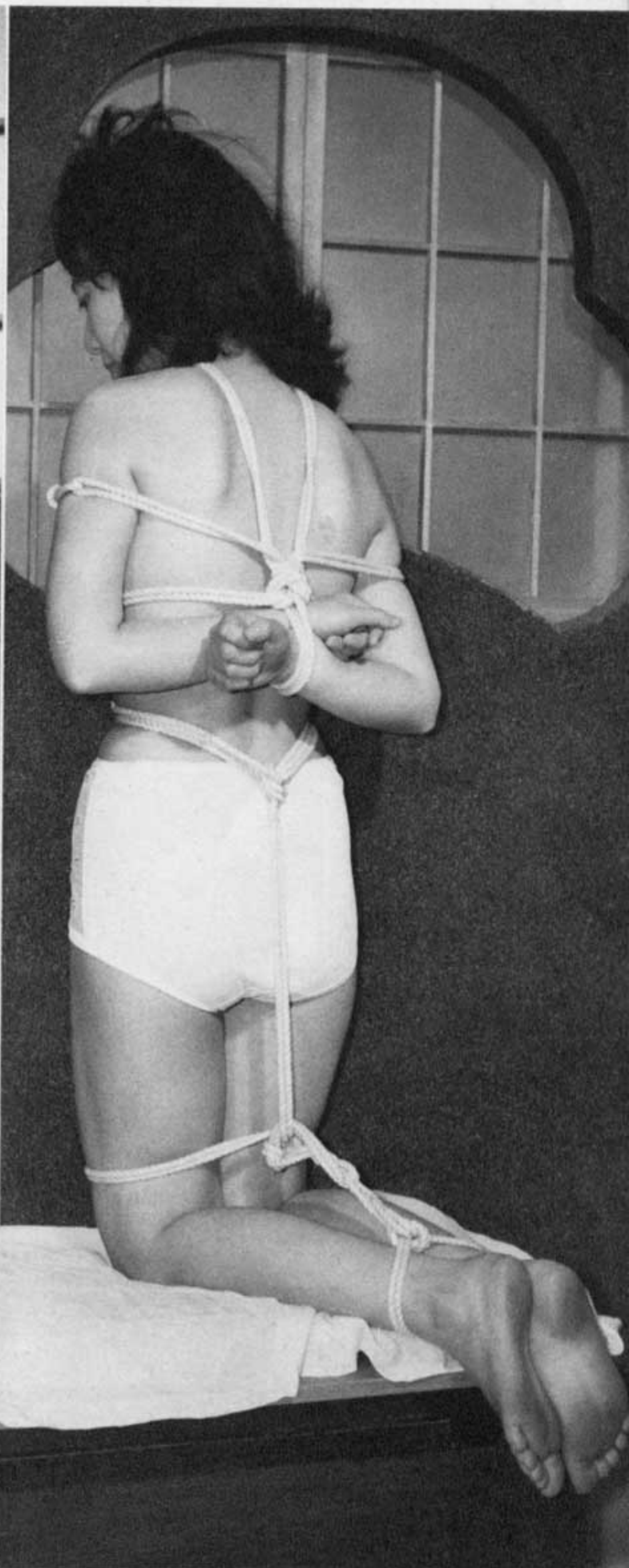
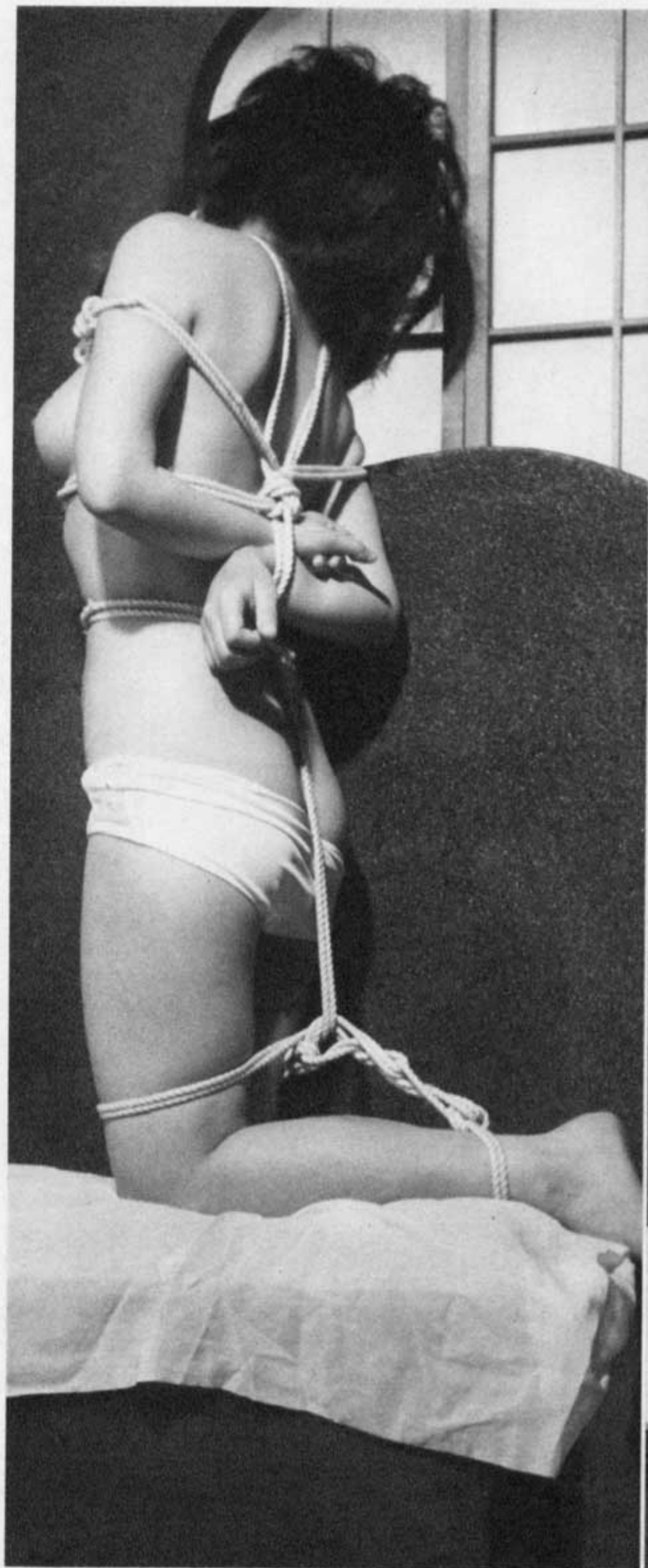
とらわれびと

はだかにむかれ　くいにしばりつけられて
おんなよ　おまえは　なにをかんがえる？
とらわれのさだめか　おんなのはかなさか

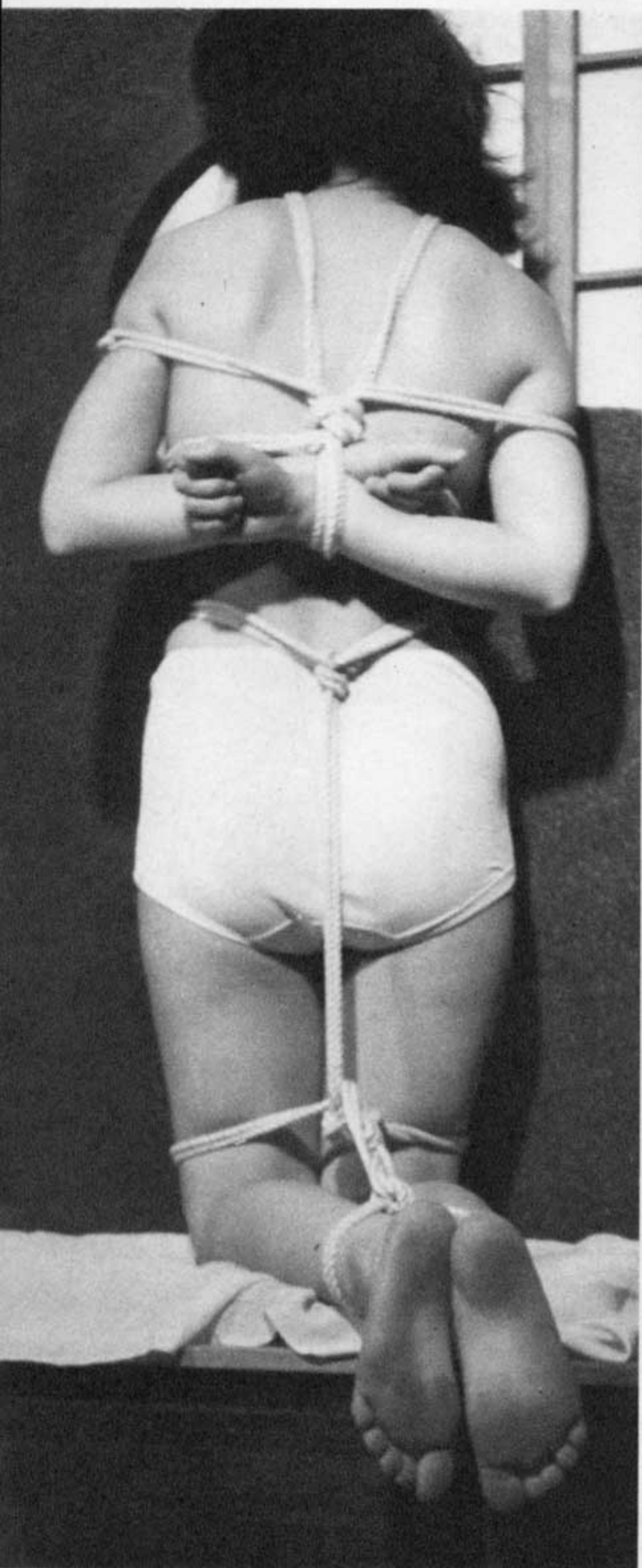




立つも すわるも できず 中腰のまま しばられた女
の 四つの姿 乳房が あやしく息づき 白い肌が
ぬめぬめと光り 一種不可思議なリズムをかなでている



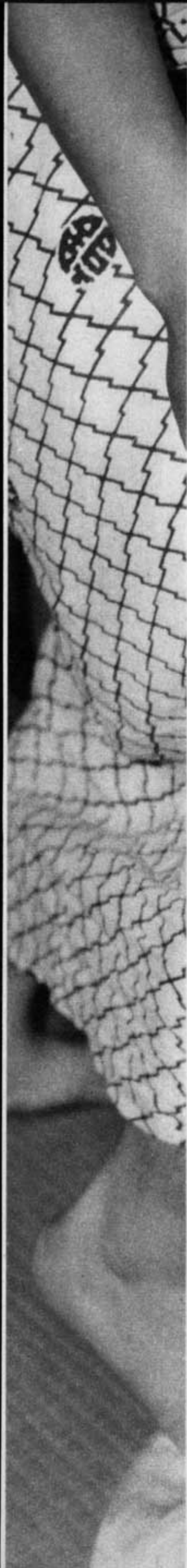
女のカルテット





ローソク責め

ローソクの火が 肌を焼き 異様な臭気が たちこめる
苦悩にゆがんだ女の顔が 殉難者の法悦に 輝く





ハナ責め

ハナは 快感の泉であると同時に 苦痛の
ポイントでもある 息をつめるために ハ
ナをつまめば 胸はふくらみ 死につなが
る恐怖が波たち ああ 残酷の一瞬 ハナ
輪をかまされれば 大きな凶体の馬でさえ
おとなしくなるのだから 女が ハナをつ
ままれただけで 悦虐にさいなまれるのも
当然 まして 手足を縛られてるのだから

青い無残絵巻

そうそうと流れる溪流のまん中の岩にその岩に置きざりに
された緊縛女体 肌をさいなむ縄と 身にしみとおる冷た
さと 自然のなかに 青色で描いた無残絵巻のひとつまよ





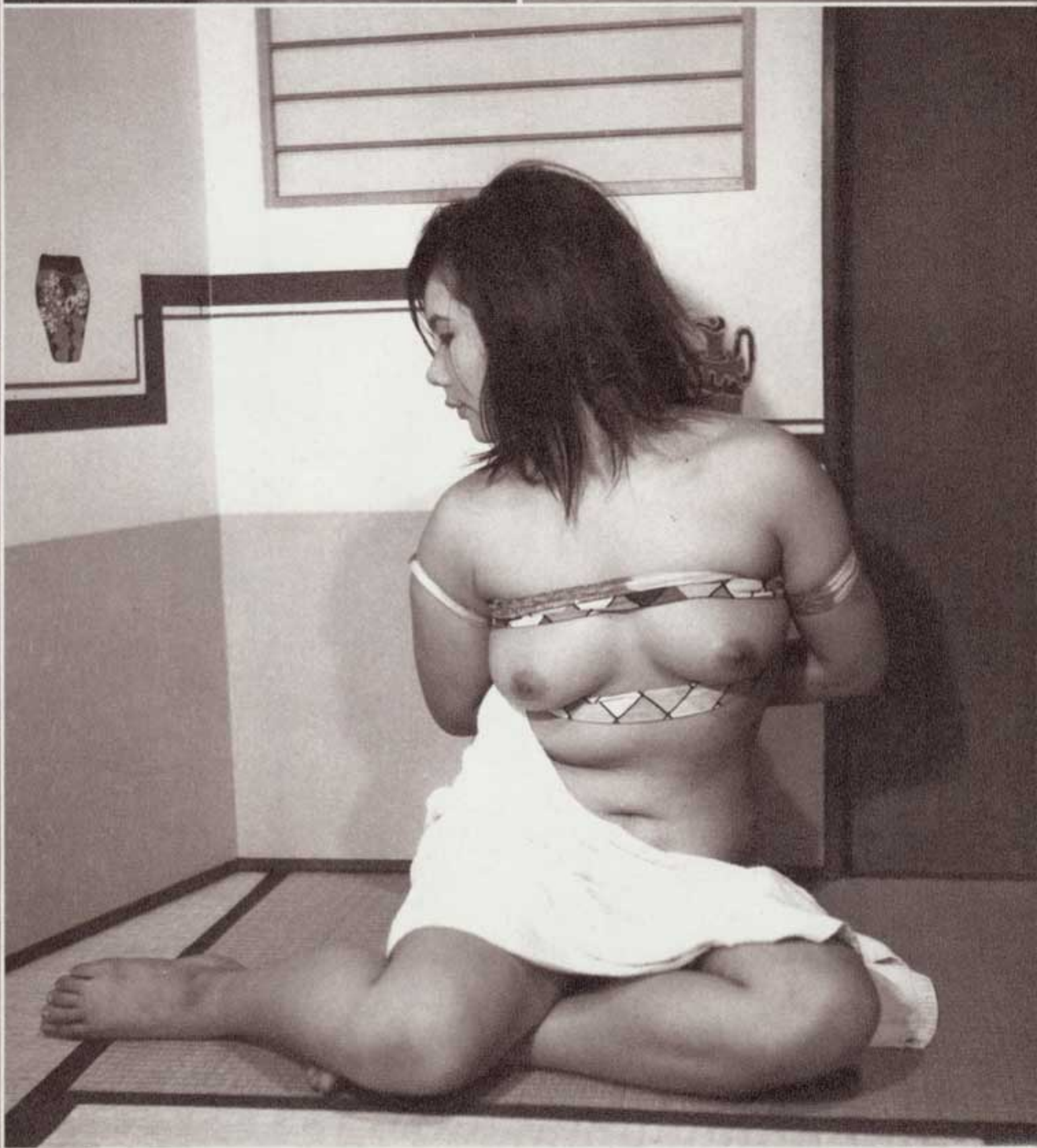
岩に寝かされて

溪流の冷たさと岩肌の冷たさ そのうえ堅い
感触 こんなところにも 女の賣め場がある

柱を抱かされて



胴と足をしばられていると たとえ手は自由であっても のがれる道
はない 柱を抱かされて いわば人身御供にあがったような女の姿態



はなやかな腰紐

わが身の着つけに使うシゴキが わが
身の乳房をしめつける 闇のあやしさ

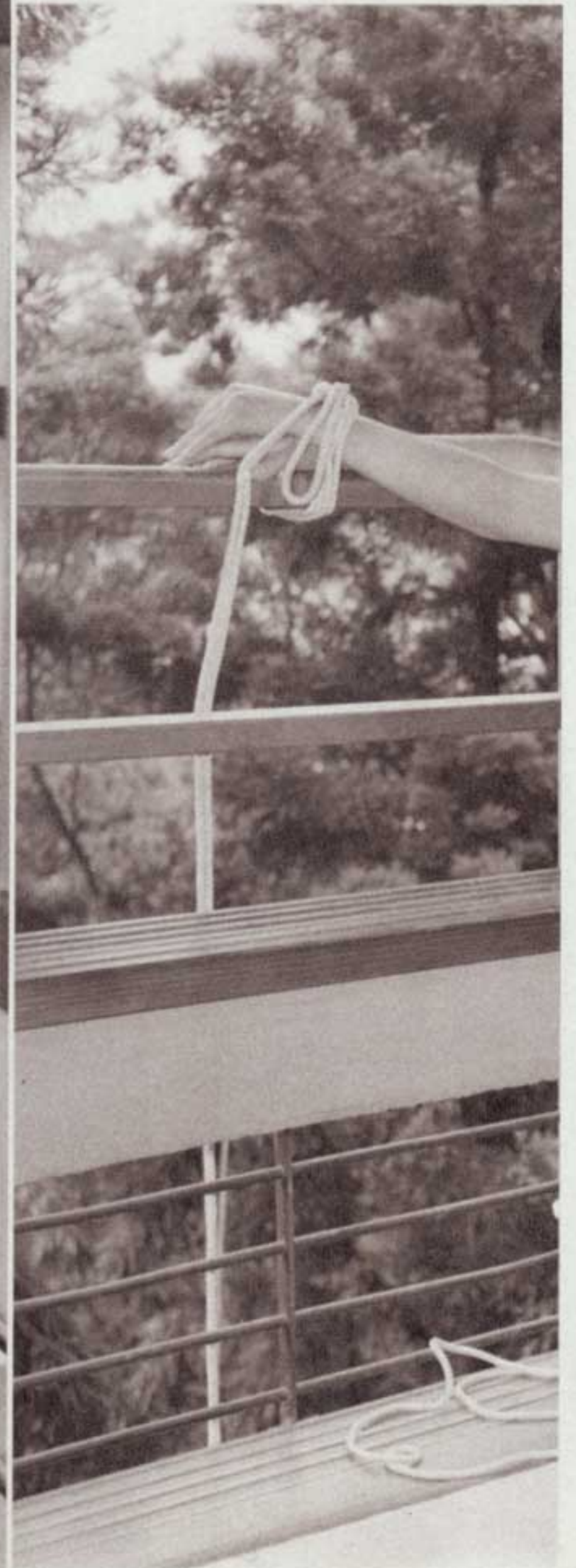


れた裸女

深い溪谷に面した部屋の 窓の手
すりに つながれた全裸の女 し
ろじろと霧の流れるたそがれに
肌をさいなまれ さわやかな夜明
けに 裸身をムチうたれる 一つ
家で行なわれる ヒミツの快樂よ



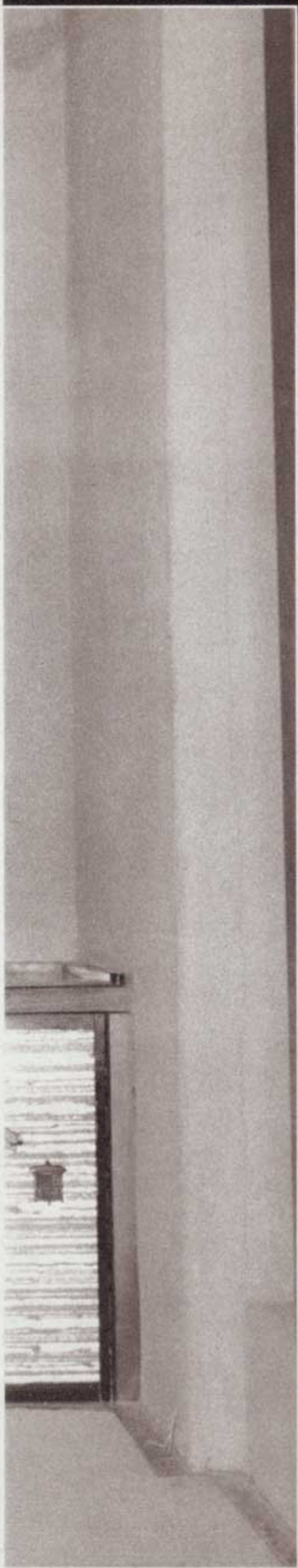
とらえら





二人とも縛られて

縛られた女がふたり 相よってかもし出す あやしい雰囲気・ほのおのようなものが立ちのぼる これはレスボスめいたデュエットだ





足をしばりつけられれば　これはち
がない合わさって　女体をつらぬく



変わったエビ責め

小さな穴にからだをくぐらせ 手と
よつとしたエビ責めだ 苦痛と陶醉



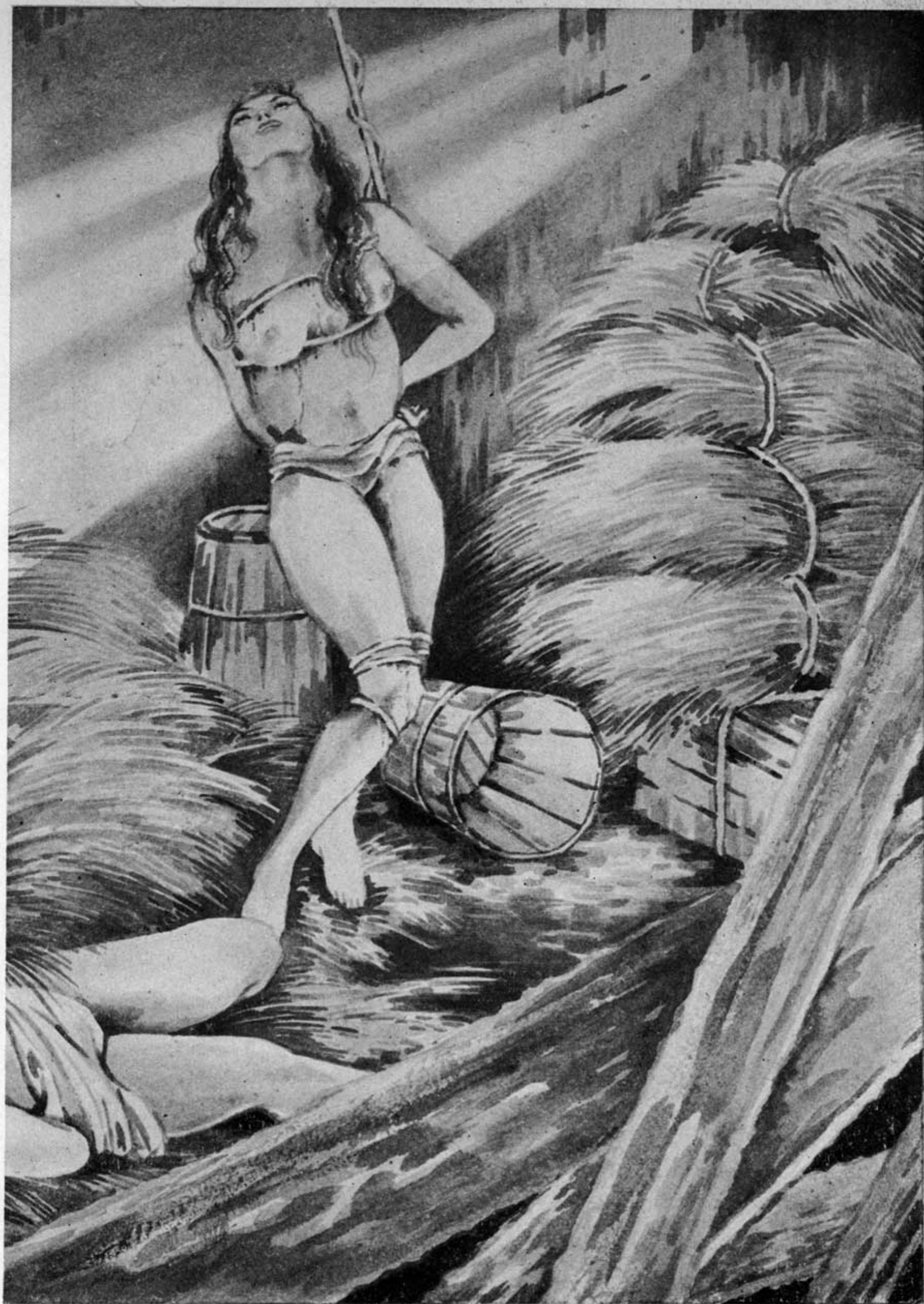
髪の毛しばり

黒髪は女のいのち その髪を
無残にも柱にしばり もちろん
両腕もいましめられて 女は宿
命のはかなさを嘆くか それと
も いのちの火をかきたてるか
とにかく この姿態にひそむ
女のこころとからだの大きな謎

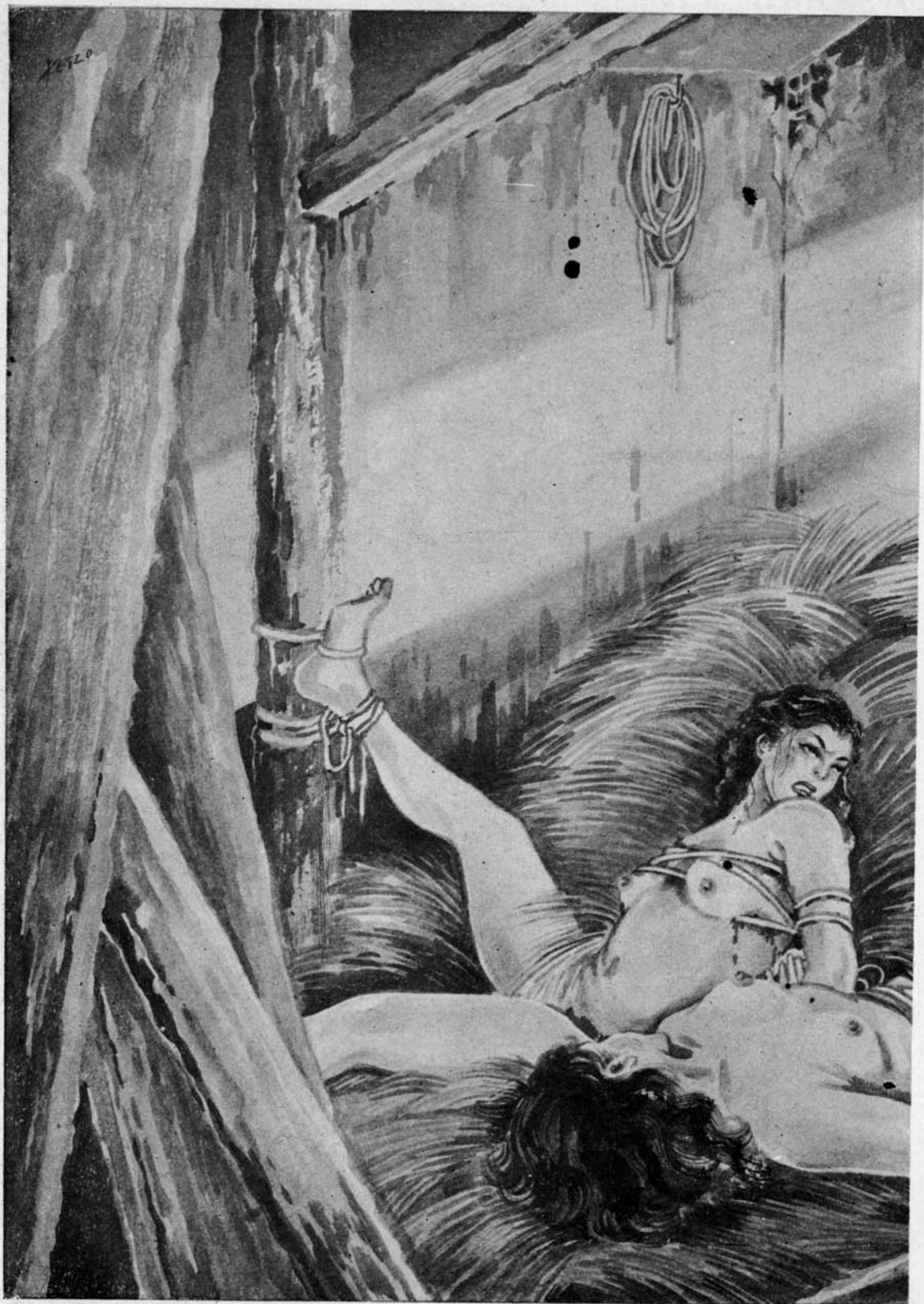




白肌針責め 後ろ手に縛られた女の白い肌に容赦なく針が立つ無残さ 田上恵子・え



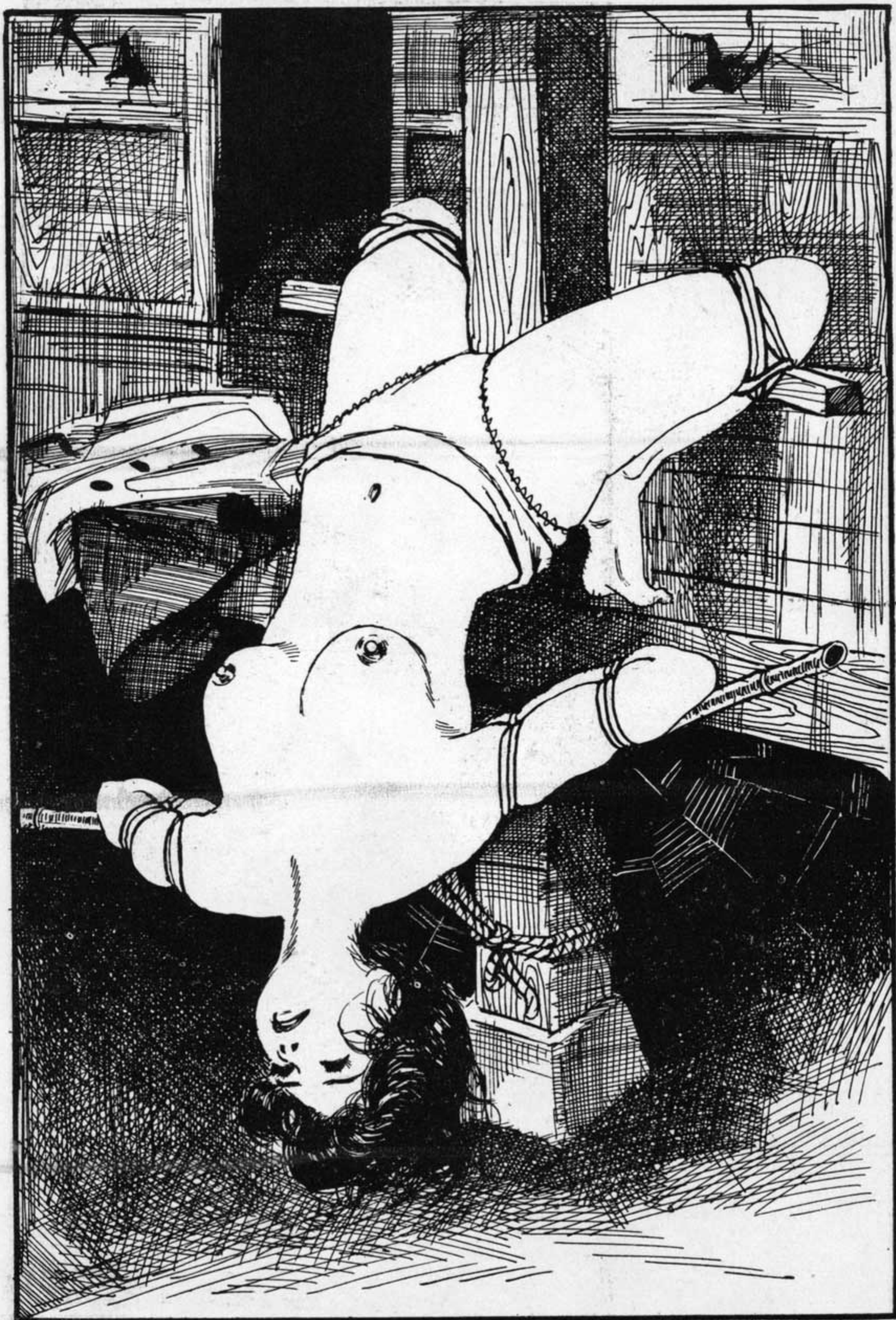
一夜を過ごしたのだろう 夜明けの光の中で 運命に身を委ねている 田上恵子・え



納屋の中の美しきえもの とらわれの女三人、それぞれの姿態で縛られている



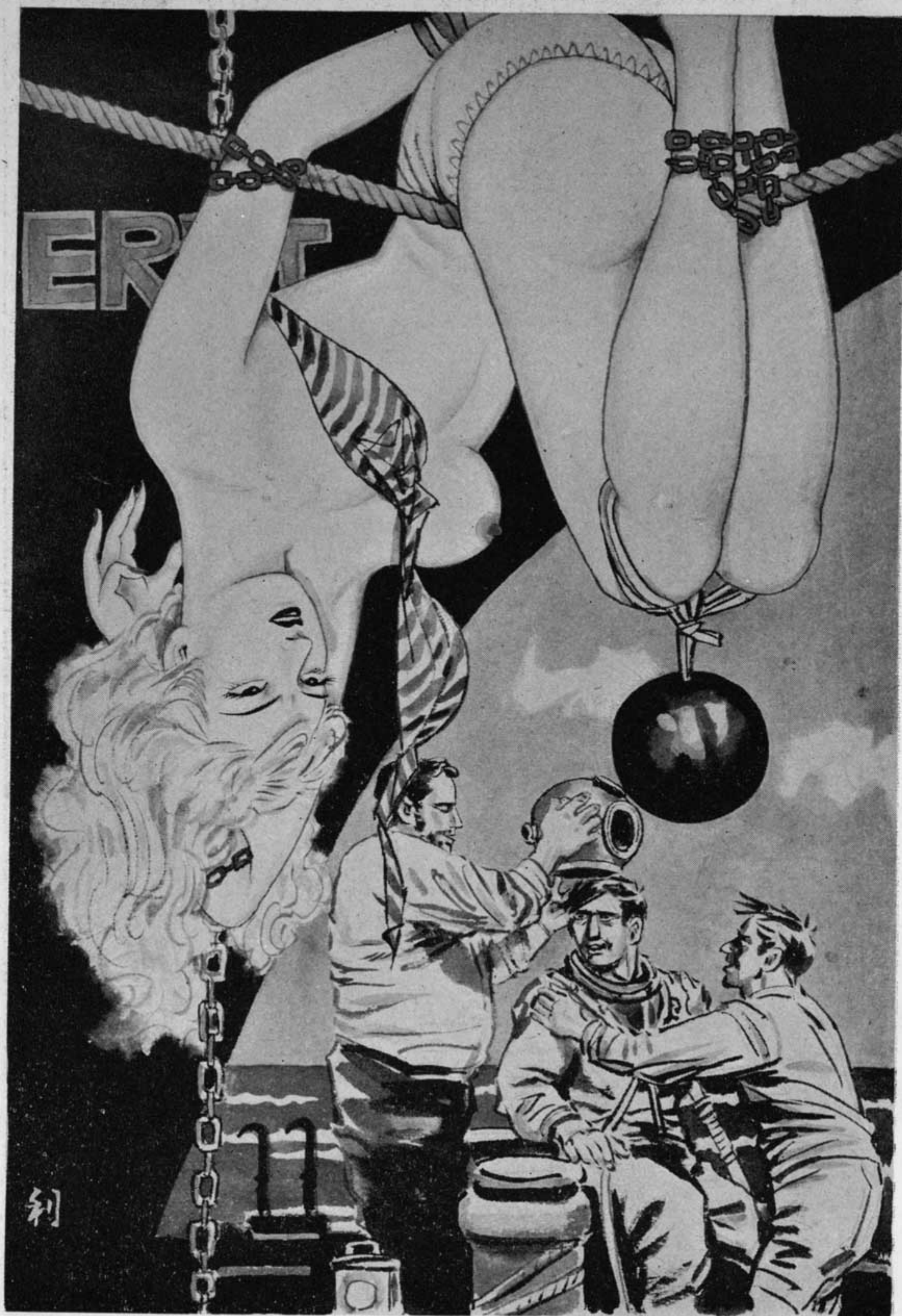
焼きゴテを乳房に ハンダゴテを赤く焼いて乳房に烙印を押す 江馬美久・え



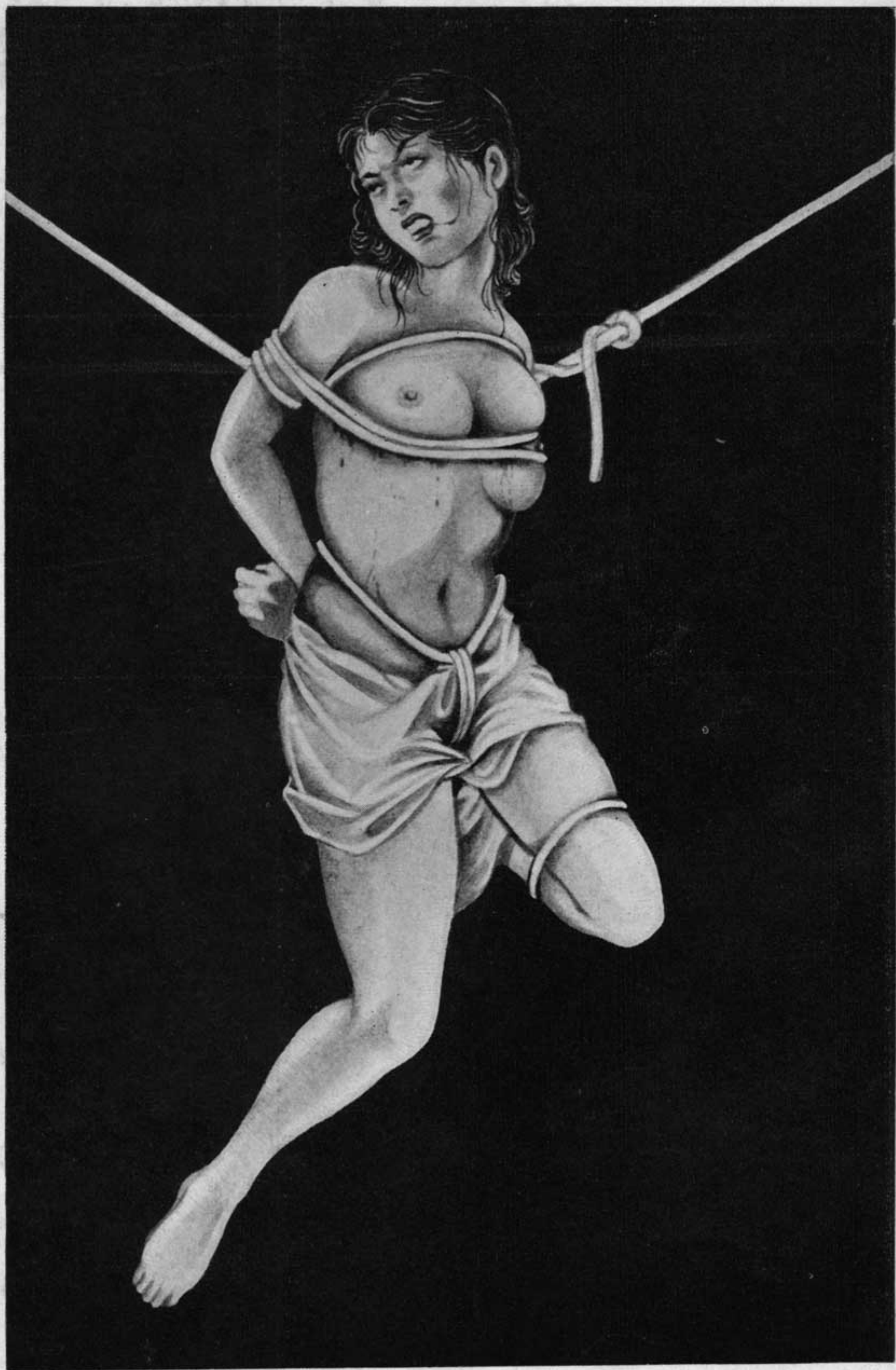
古屋敷の幽囚 荒れはてた屋敷の廊下で 柱に逆さに縛られた少女 江馬美久・え



海底イカリしぼり 海底の錨にくくられた女の肌を魚がつつく 小田利美・え



帆綱で二つ折り 帆綱につり下げられた女の膝に 鉄の玉が重たい 小田利美・え



二の腕宙づり ガンジガラメに縛られ女はミノ虫のようにうごめく 田上恵子・え



片足宙づり

この不安定な姿勢で 女は 何を考える？ 堪忍の
よるこびか 苦痛の恐怖か それとも 刻々に麻痺
していく感覚のなかに没入してしまおうというのか

股が裂ける

支えている足がしびれてしまったら、
いたい、どうなるのだろうか、時間をか
けて、じわじわと責める。これは静かな
拷問だ。むかしの刑罰、股裂き。に似て
この美しいけにえを、まっ二つに引き
裂こうというのなら、むごたらしすぎる





縛られた肉塊

このボリュームを見よ 縄をかけられた
だけ さらに容量を増した感じの女の体



お灸責め

大きなモグサに火がつけられて
じりじりと肌を焼く熱さ 手と
足をしばられているから 払い
のけることのできない つらさ
どんなイタズラをしたかしらな
いが この焦熱地獄のなかでも
女には 法悦の境地があるのか



同性悦虐

レスボスの一つの型は 女が女を責める 縛りあげた女を馬に見たて ドンと重いお尻を据えてまたがった女騎手 手綱さばきもあざやかに といいたいが この逆さ鞍はどうしたわけか それでも 責める側も 責められる側も とにかく満ち足りるまで このプレイは つづけられるだろう





肌にくい入る縄

容赦なく縛りあげた縄が 柔肌にくいこみ乳房をしめる
無残なまでの緊縛よ これが闇で行なわれるというのは
愛情のひとつの現われか あるいはまた 情感の促進剤









活魚料理

さて この生きのいい裸女を
 どう料理しようか？ ナマスか
 生きづくりか とにかくく マナ
 イタならぬテーブルにのせられ
 た彼女の運命は どっちにして
 も 料理人の思いのままなのだ



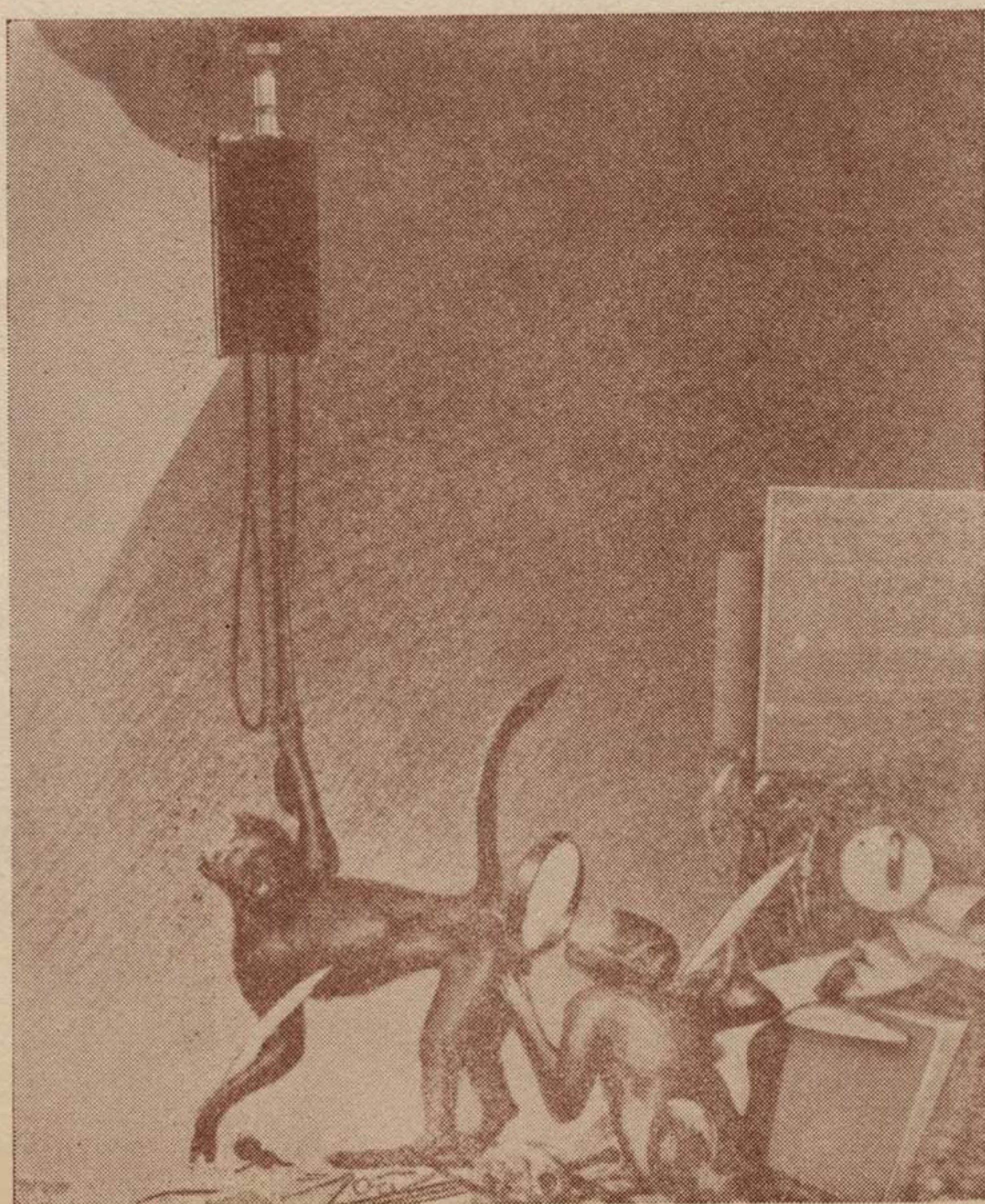
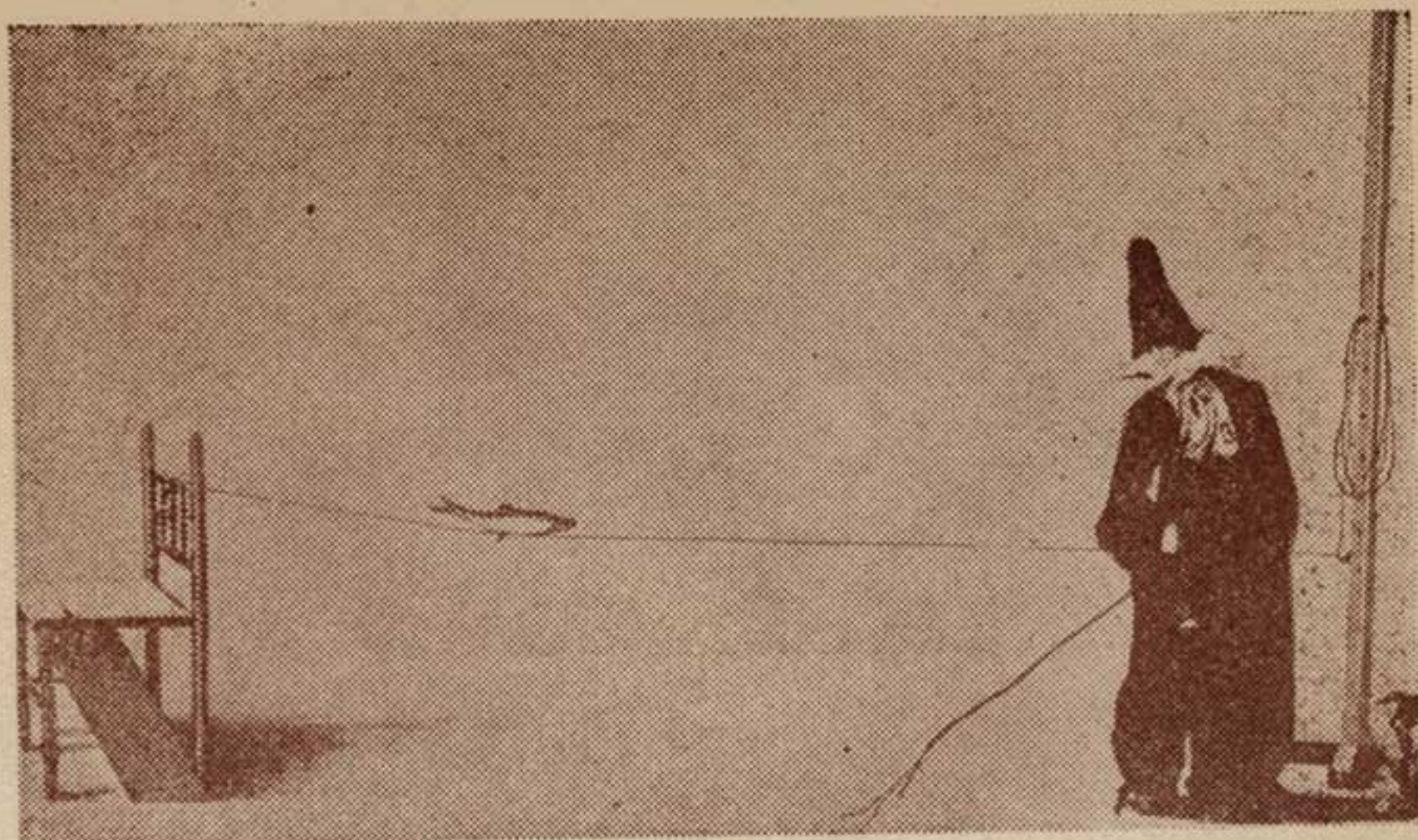
縄と水と

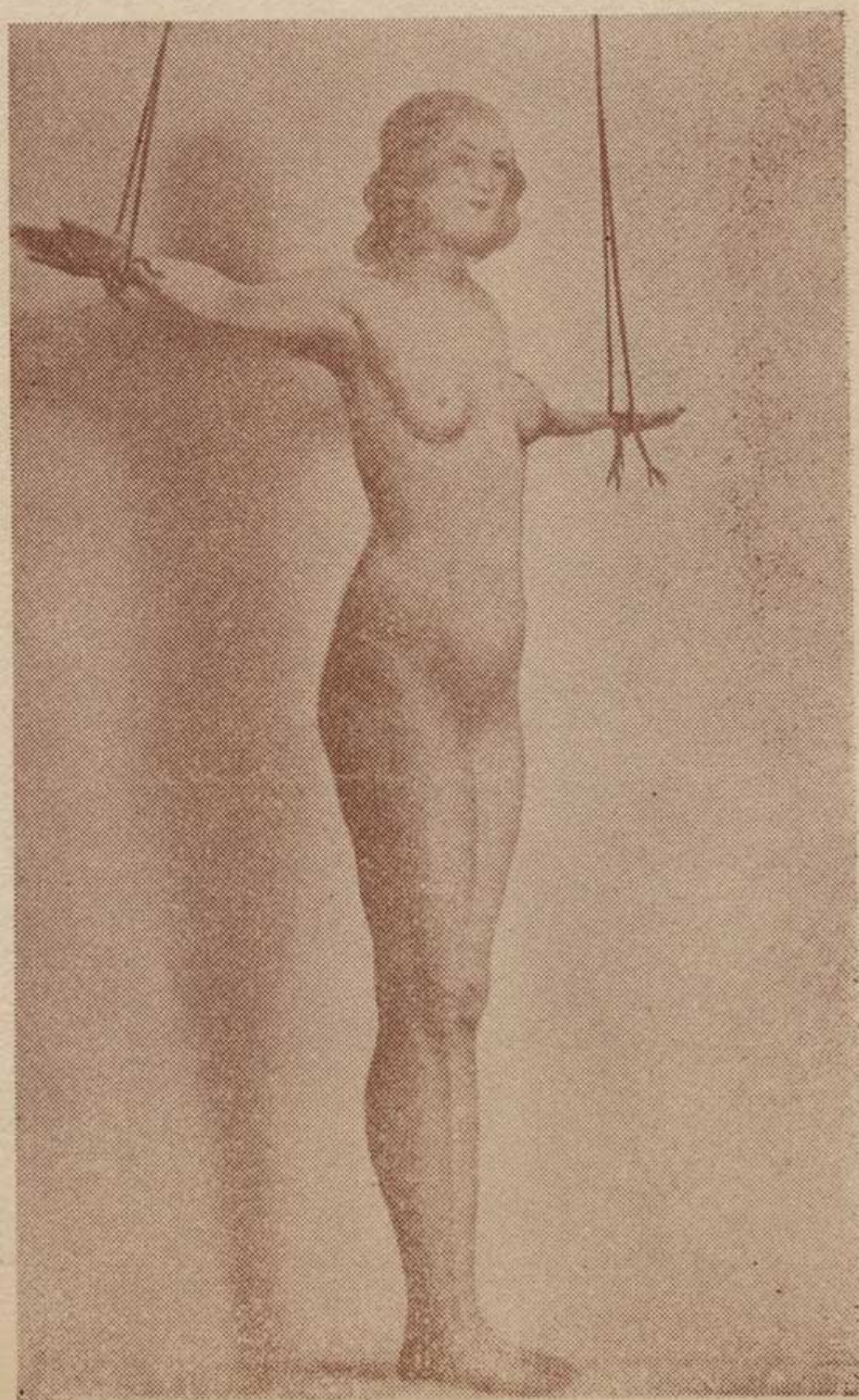
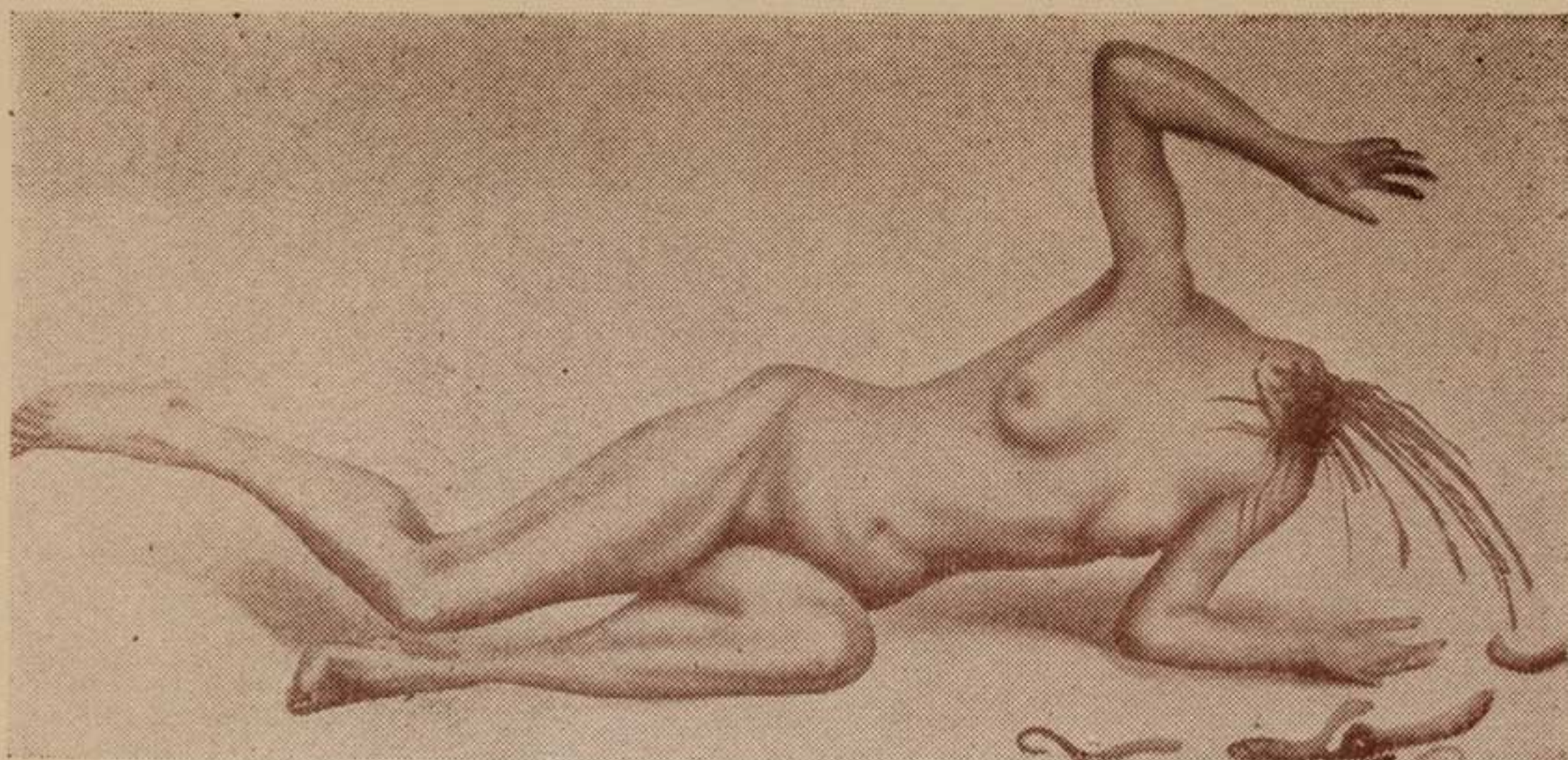
縄が水に濡れると キチキチとして 肌に痛い 水中の大きな石に寝かされて 足先から冷たさが はいのぼる それが やがて 全身におよぶとき 感覚をなくした女が 誕生する

リチャード・ミューラーの
グロテスク画集



怪獣に襲われた男





(右ページ上) 魚に綱渡りさせる小人
 (右) 美女の裸体を撮影するサルたち
 (上) 首をはねられたハダカのおんな

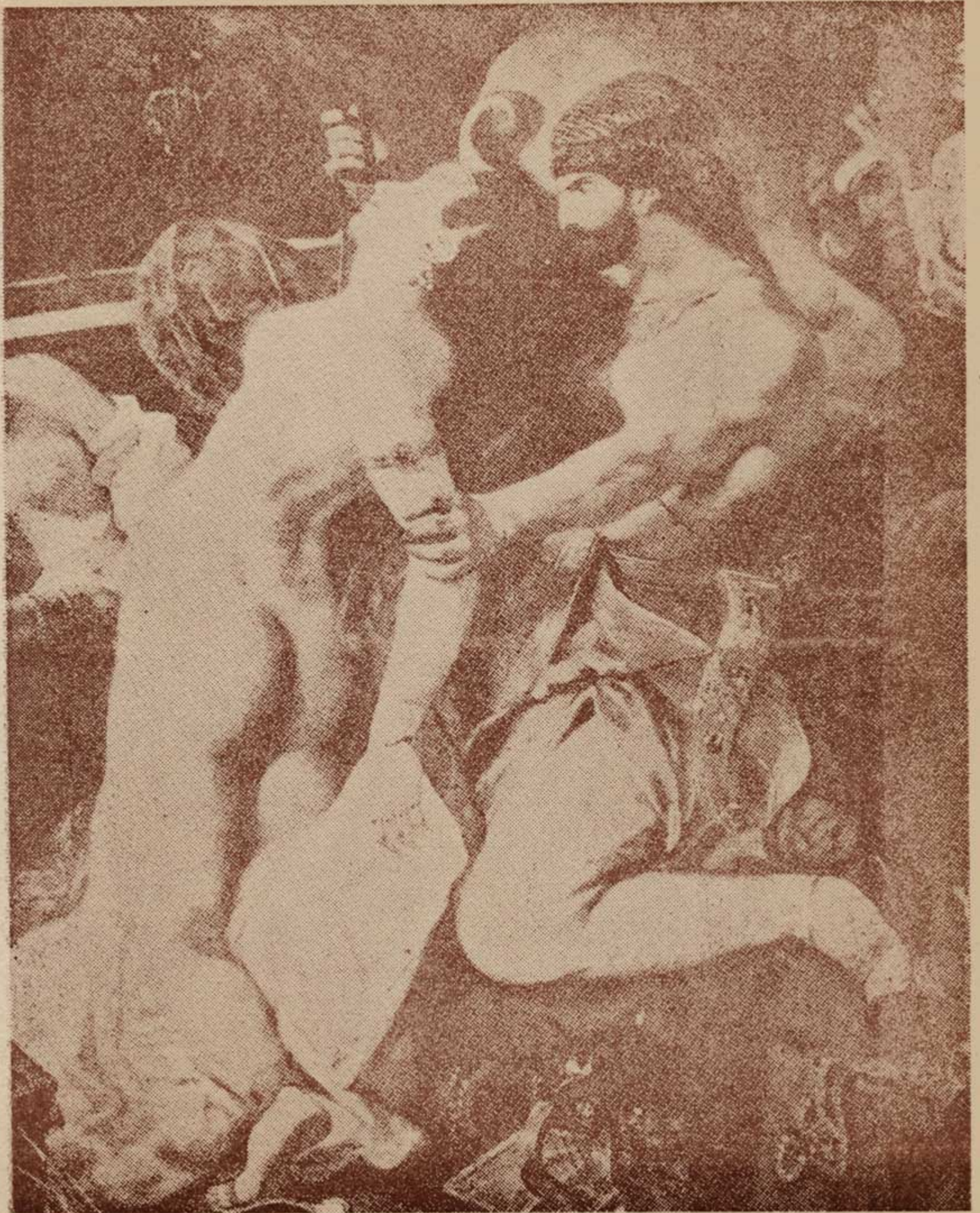


巨大な手に押しつぶされる男



男と格闘する熊
おいつ

世界名作秘画誌上展覧会



サルダナパルの死（ドラクロア筆）

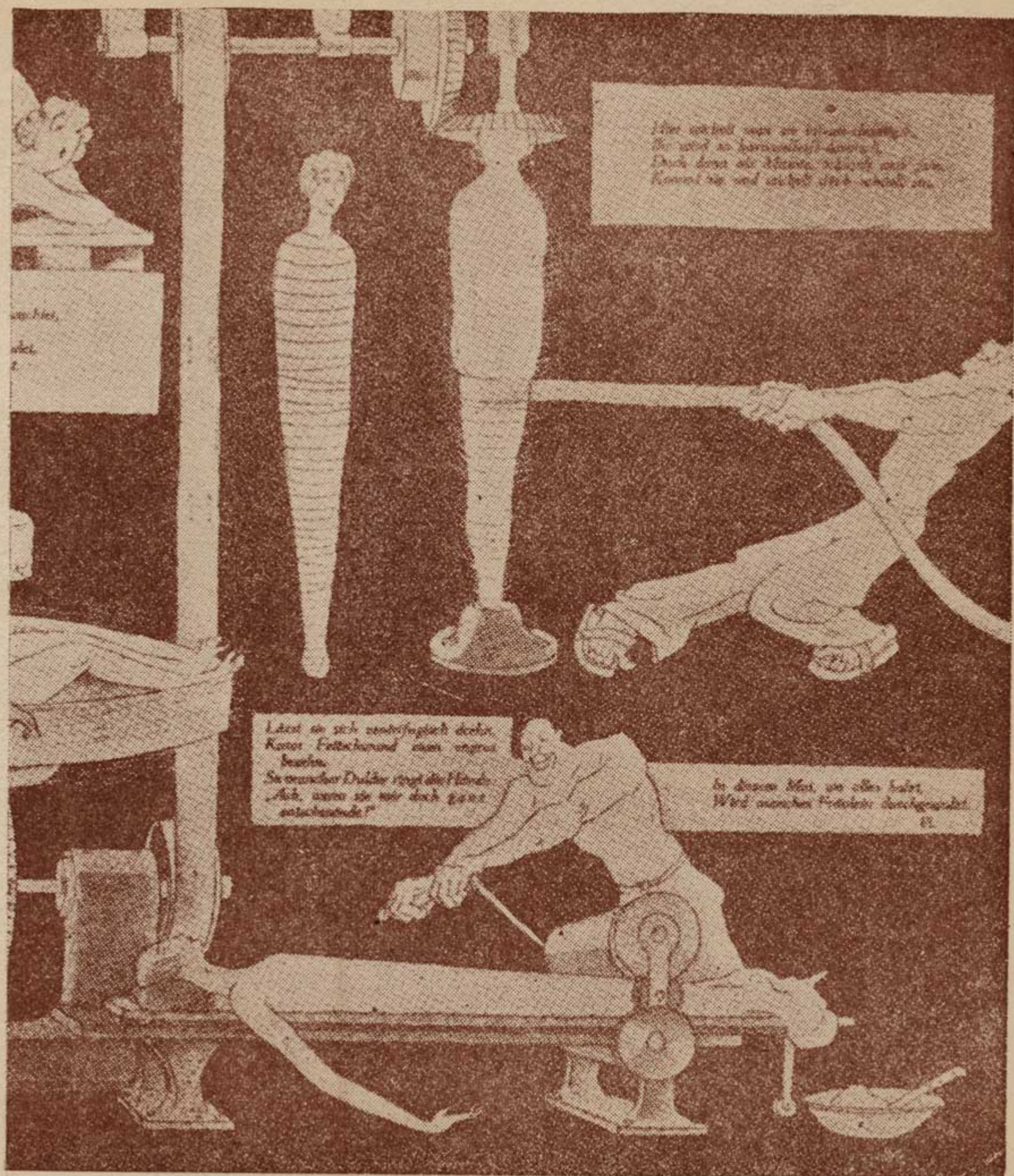


ルクレチアの死 (クェンチン・マシス筆)

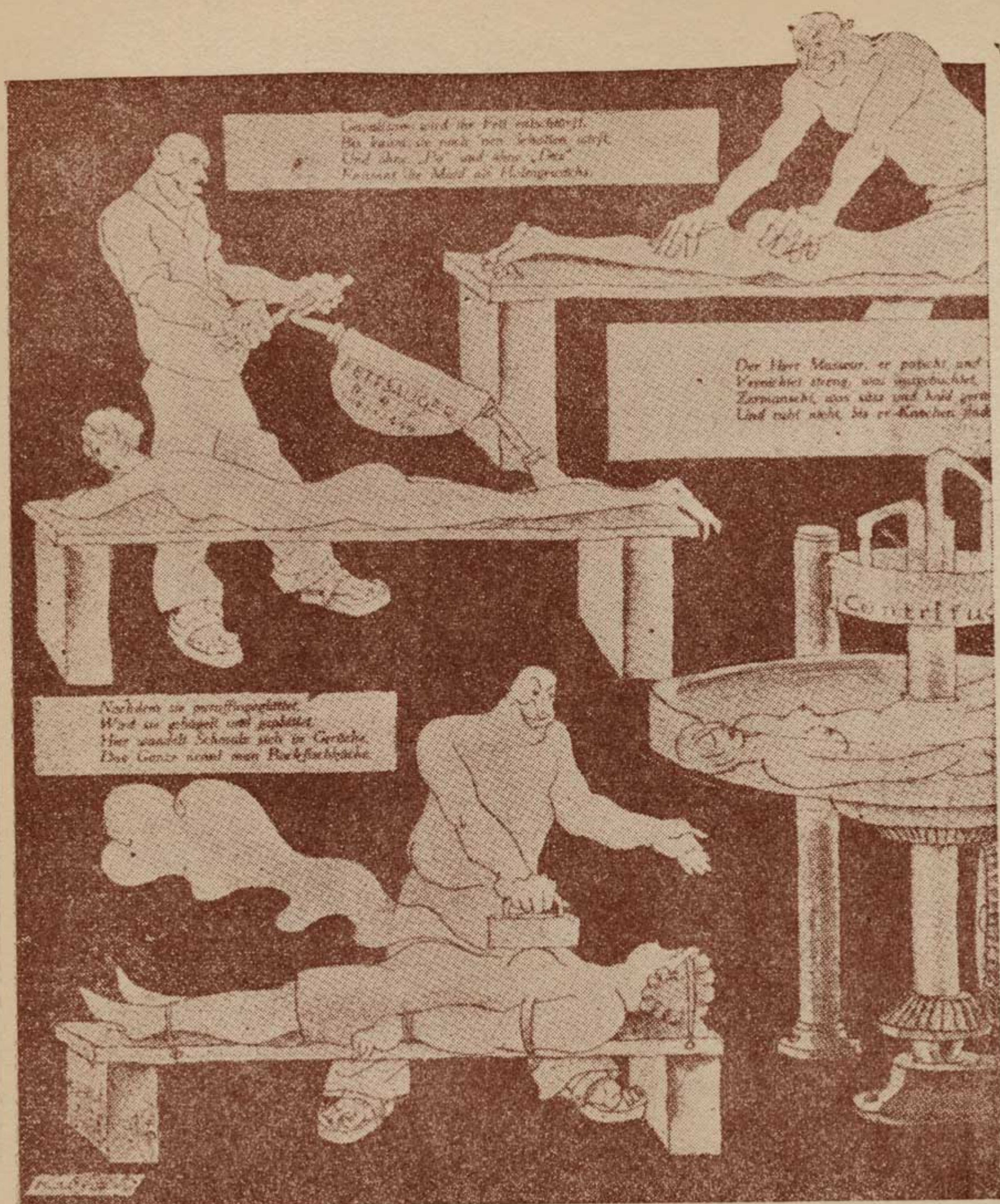
ШИШУ. ОАИТАН ТЕБЕ БОМЕНА РУЖИЦЬ И ЧУЖИХЪ ЛЮБОВНИКОВЪ
 ВОЗЛЮБИЛЪ БОМЪ ТЕБЕ СЛОНУ СПИМУ РУЖИЦЬ ПОЗАВУЛСЯ
 ИНИЦЬ ВОСПИ ДСОЛТИ: ЛЮБИЛЪ ЗАВОННОГО СЛЮГА НЕНКАТЬ
 И ТЕБЕ ВНОГО ДРУГА: 2: ВАПНА МОИ ПОМНАУИ МЕНА: 3: ИНИЦЬ СПИМА
 ВСЕГДА ЛЮБИТЬ ТЕБЯ: ВТОМЪ ВНИКАТИ ПРЕДТОБОЮ: ВОЛЯ ТВОЯ
 НЕАМНОЮ: 3: АХЪ ЛЮБЕЗНАЯ МАЯ СЕСТРИЦА ПРАПАЛА: НИКЪ ТАКЪ
 ВЕСАУ ПОПАЛА: БЕАМИ ЖАЛЪ НЕЗНАЮ КАКЪ ВЫТЬ: НЕМОГУ ТЕБЕ
 НИЧЕМЪ ПОСАБИТЬ:

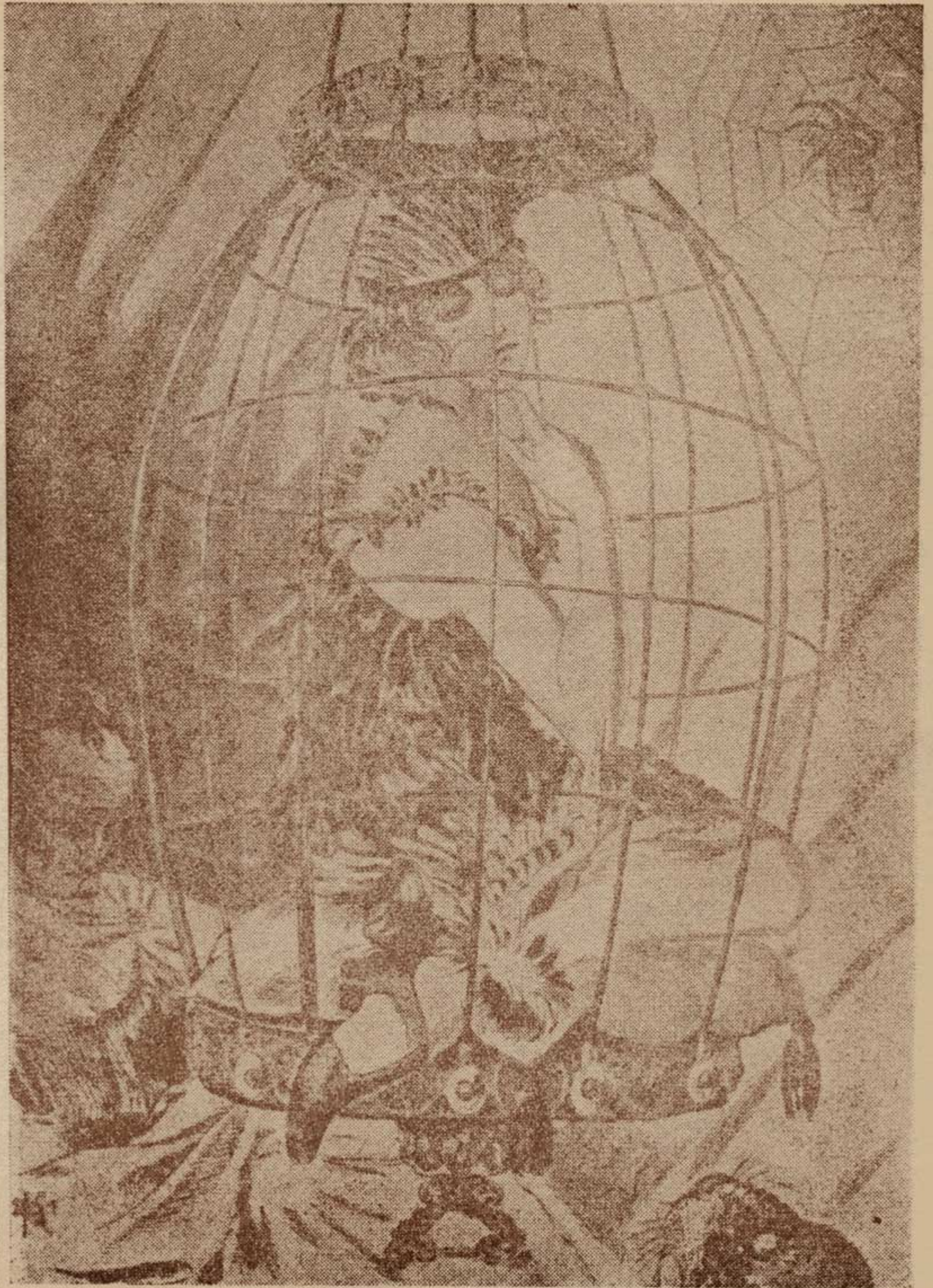






八頭身美人製造株式会社











恐るべき髪飾り



女体緊縛考

湯 浅 重 二



△1▽

女性は、もともと、性愛の世界では、受け身であるといってよからう。ということは、原始のむかしから、男は戦う役目を引き受けてきて、女はいつも、男によって守られてきたからであらう。

ということとは、いつのまにか、性愛のイニシアチブが男性側ににぎられてしまったということである。

この性愛の受け身ということは、マゾヒズムに通ずる性向であらう。

だが、マゾヒズムという性向は、受け身一方ではないこともろんである。いわば、受け身でありながら、そこには自分から没入していく積極さがあるからである。

女性が縛られて、そこに歓喜を見いだすとしたら、それは、この受け身の積極性といっているのではなからうか。

△2▽

縛られることが女性の受け身の積極さであるなら、女性を縛ることは、男性の能動的な積極さといえよう。もちろん、これは、サディズムにつながる性向である。



したがって女性を緊縛することは、相手の自由を奪うためである。自由を奪われたイケニエは、自分の思うままに、いじめようが痛めようが、ムチ打とうが、とにかく、なんでもできるのである。

そういう想像が、いくらでもできるところに、女体緊縛ということは、サディスチック

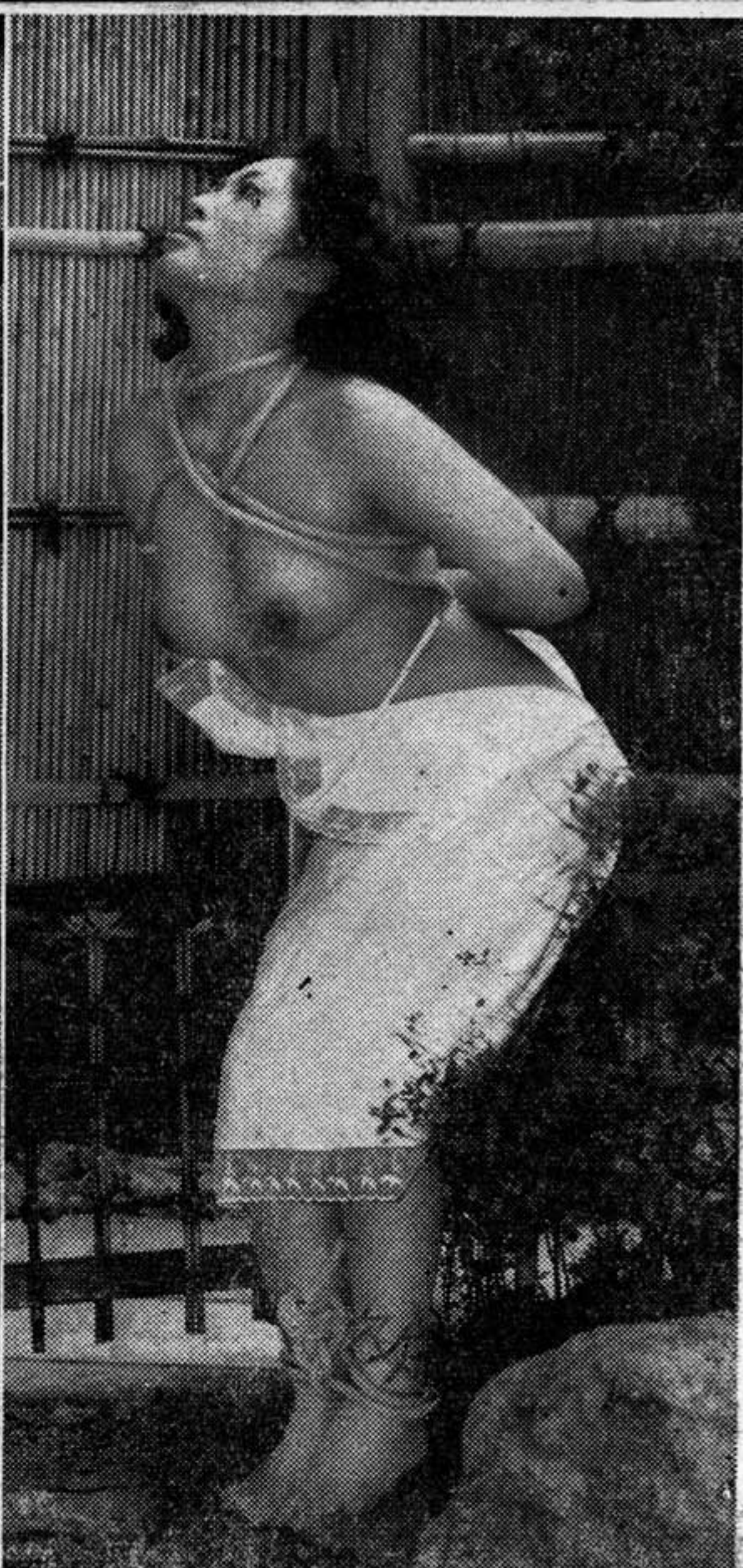
な男性にとっては、またとない喜びを感じさせるものなのだ。

△3▽

緊縛の方法というか、形式というか、それには、第一に、自由を奪って逃走させないという目的がある。このごろは手錠という、簡

単だが、合理的な、その目的のためのものがあるが、むかしは、刑罰人を捕えたとき、縛って、その自由を奪い、逃走を防いだものである。

刑罰人のなかには、何度も捕えられ、縛を受けるところから、いつか、自然に、その縄をとくなり、縄から抜け出る知恵を身につけ



るものが出て来た。

その結果は、よりいっそう嚴重な緊縛の方法が考えられ、工夫がこらされた。そして、いろいろな緊縛の形式が生まれたのである。

かつて、太平洋戦争のときであるが、中国大陸に転戦したとき、こういう体験をしたことがある。

スパイの容疑で捕えた中国人を縛りあげて庭先の立ち木か、柱にくくりつけておいたのが、夜が明けてみると、むなしく縄だけが残って、肝心のスパイ容疑者は姿を消しているということが、よくあった。彼らは、まったく、縄ぬけに妙を得ていると、今でも感心するくらいである。

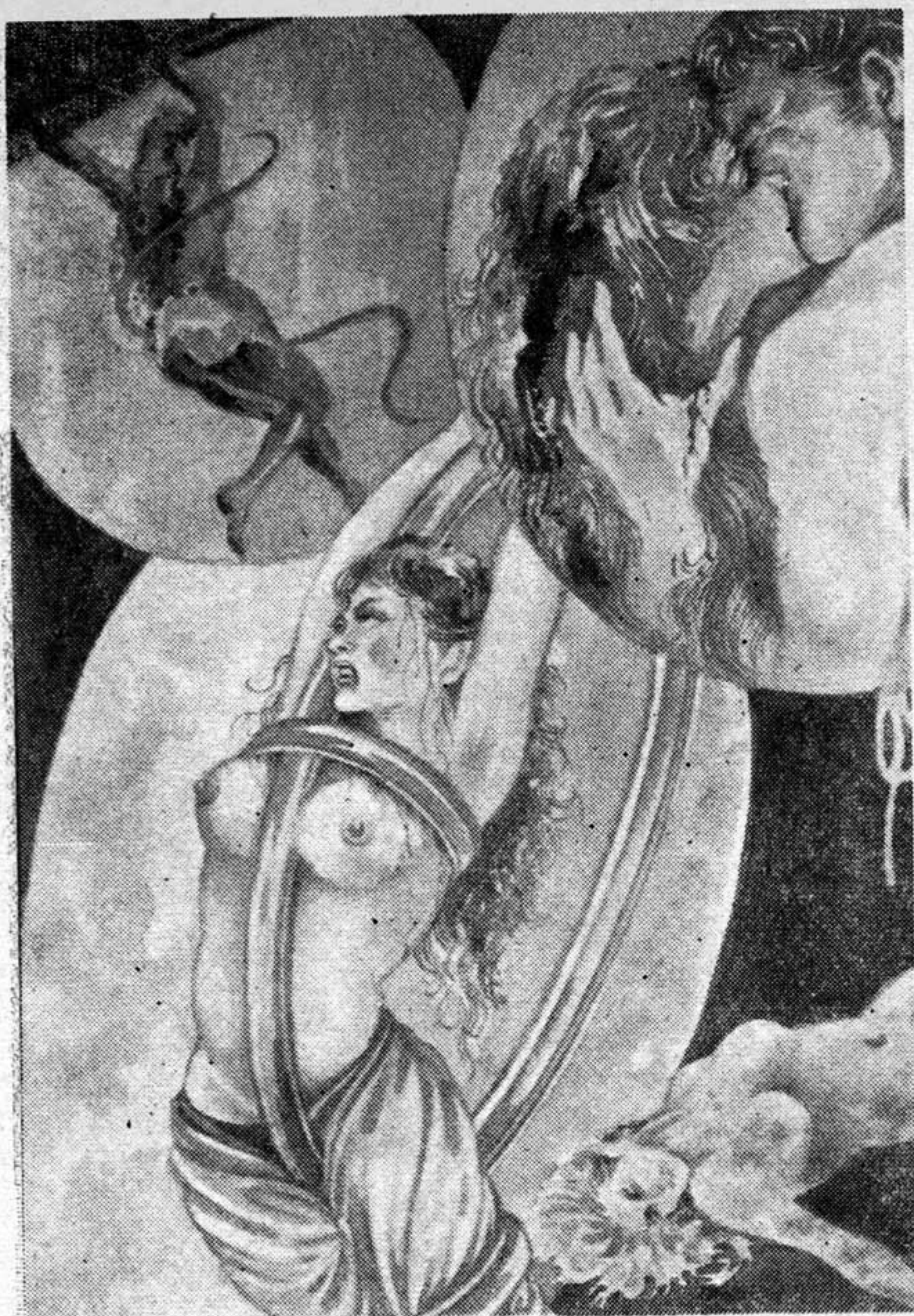
もちろん、縛り方に不完全な点があったからであるのだが……。

△4▽

縛るにも、コツがあり、秘訣が必要となるわけである。よく、ガンジガラメということがいわれるが、ただやたらに縄をかけるのではなく、急所というかポイントというか、そこを忘れると、せっかくの緊縛も役に立たなくなる。女の乳房は、縛り方で、呼吸をとめることさえあるくらいだから。

悪徳の栄え抄

マルキ・ド・サド原作
田上恵子・え



主人公はジュリエットとよばれる美少女で、あたしという一人称で書かれた告白体の物語。

彼女は裕福な家庭に育って修道院の生活をおくるが、そこで色欲の快楽を教えこまれる。そのうち家が没落して高級売春婦に身を落とすが、サド、マゾ、同性愛、盗みなど、あらゆる悪徳行為に身を投げ出し、いよいよ美しくなる。

『犯罪友の会』にも入会するが、この会は「世間の愚か者があさにかにも罪と呼ぶ、あの力強い行動に、後悔の念なく、最大限に没入することのできる人間こそ、最も熱心な信徒と見なす、という主旨。

この会合では、第一の部屋は単純な趣味つまり、あらゆる愛欲行為のために使われ、第二の部屋は鞭打およびその他の奇態な情欲のために使われ、第三の部屋は残酷な趣味のため、第四の部屋は殺人のためにあてられるといった具合で、どの部屋にも死刑執行人、鞭打人がいるありさま。

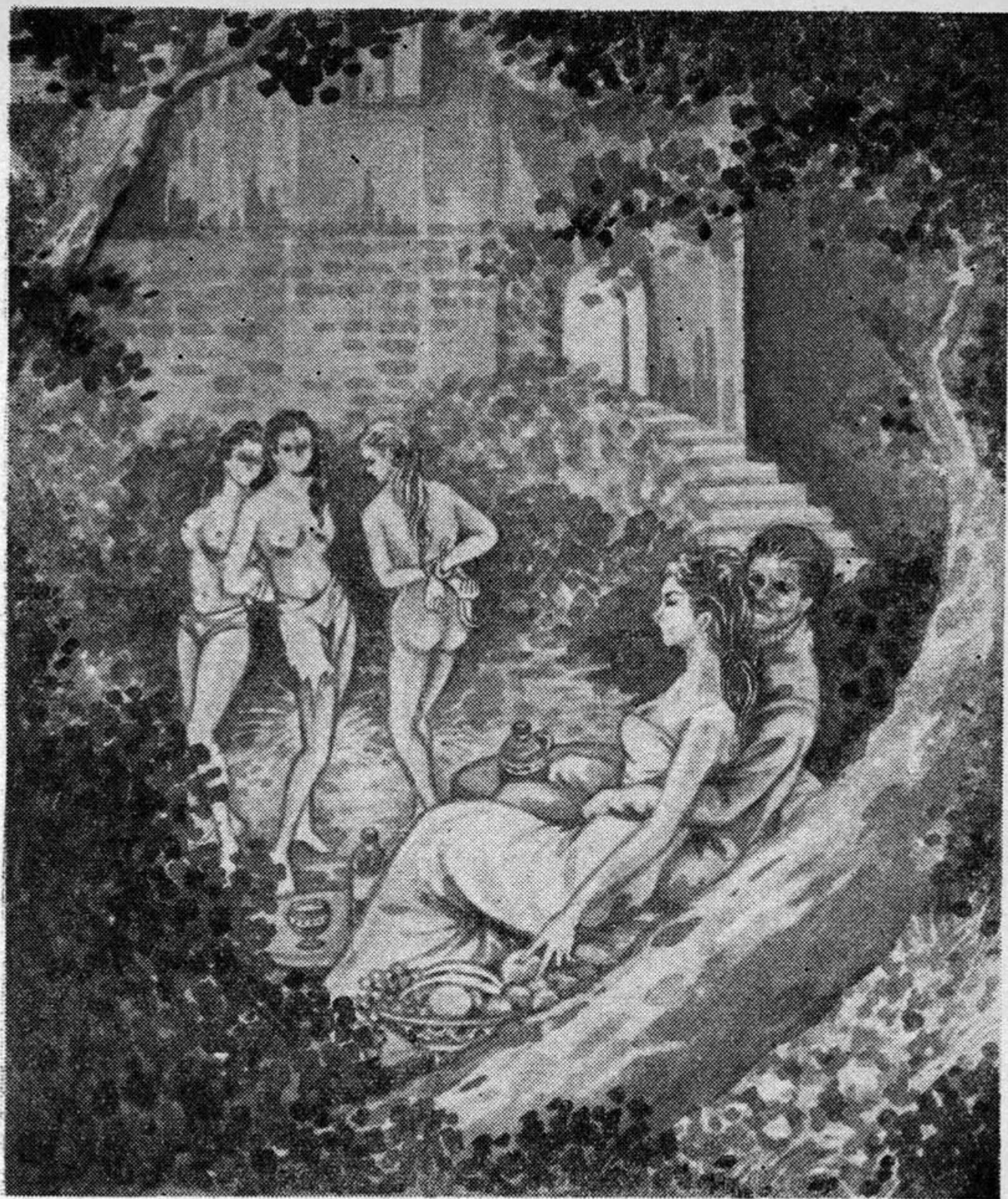


サン・フォンという男がいる。

好色で、残忍で、陰険で、しかも尊大ぶっている。フランス国家の財政をごまかして莫大な富をつくり、気まぐれに二万人以上の老若男女を牢にぶちこんだりする。

彼の晩さん会のために後宮が構成されているのだが、そのための娘たちは、とくに選ばれた美人の処女ばかり四人。いちばん若いのがエグレという金髪で十三歳、次がロレットで、花の女神フロオラにそっくりの初々しい十五歳。アンリエットは十六歳、ランダーヌは十七歳で、ともに花のように美しく、すばらしい肉体の持ち主。ほかにジュリエットとデュヴェルという女郎屋の女主人の計六人。しかも、十五歳から二十歳までの青年が六人、女のような髪を結って全裸で食事の給仕をする。

この青年六人と、前記の六人の女を、それぞれ二人ずつ組み合わせさせて三人の好色漢が思いのままにできるという晩さん会が始まる。



ある晩さん会のこと。気持ちのいい夕刻で、こうこうたる明かりに照らされ、リラやバラの茂みの下で、絶妙な香気を発する雲のただよう中にすわっているのは、ジュリエットと例の好色漢。宴席の中心は、珍奇きわまる花花の山でうずめられ、そのあいだに、黄金の食器などが置かれている。

すると、茂みの頂きがパツと二つに割れて、たちまち、燃える雲の上に三人の復讐女神が、その宵の宴会の犠牲者となるべき三人の娘を、それぞれへびで縛って、引き連れてあらわれる。

女神たちは、雲の上からおりて来ると、それぞれに連れていた三人の娘たちを、近くの樹木に縛りつけて、さて、これから参会者の気ままな意志のとおり行為が行なわれることになる。

三人の娘たちは、お尻を丸出しにされ、道楽者たちはこれに接吻し、ぺろぺろなめ、噛みつく。
「ムチはバラの枝がいい」



また、この宴会を催す道楽者の夫人たちも、それぞれに楽しむ。

夫と協力して、若い娘たちを集め、それぞれにムチの束を持ってこさせる。そして、

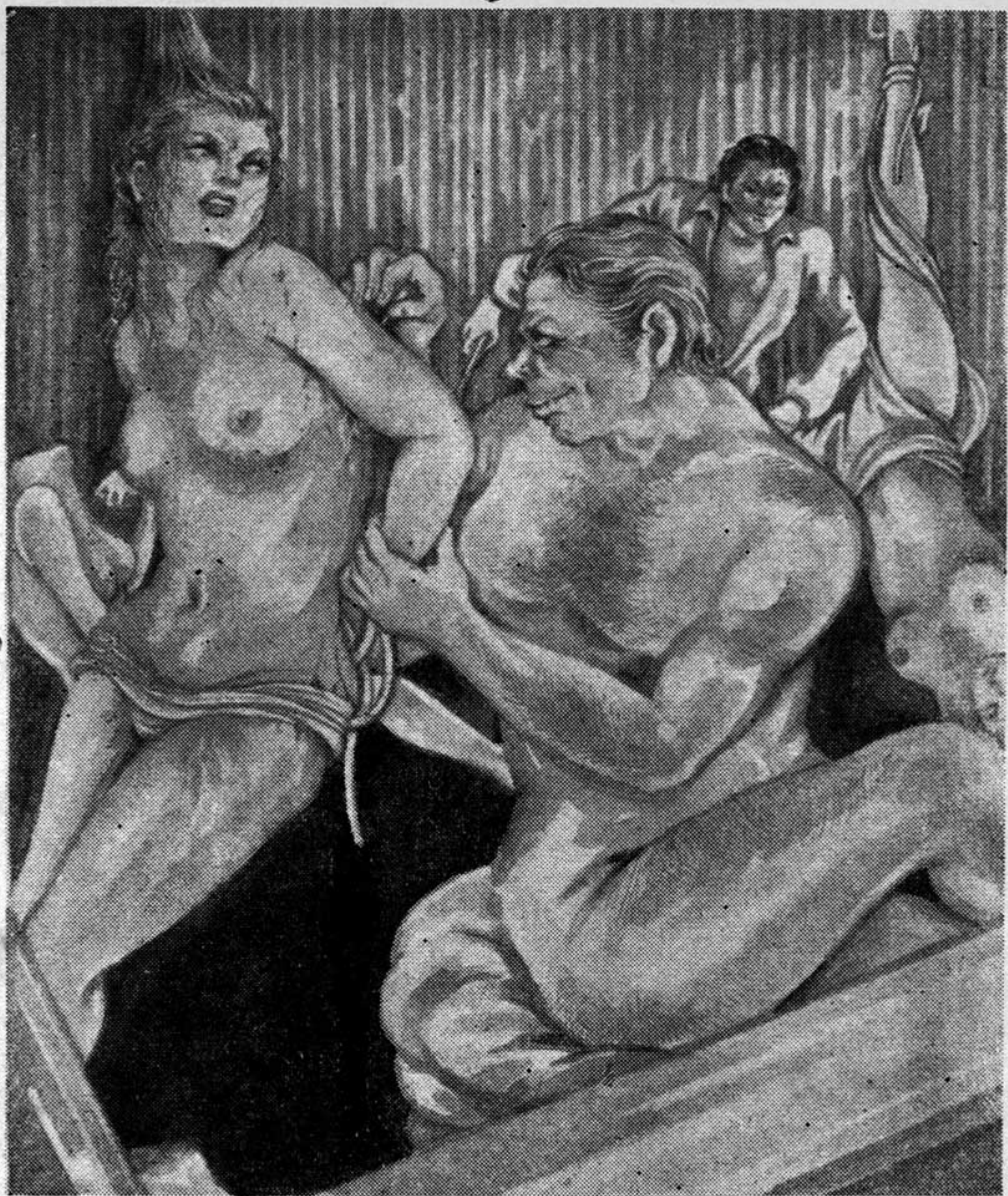
「こっちへお寄り。あたしの足もとに膝まづいて、昨日お前がした不始末のお詫びをおし」

「でも奥様、わたくし、不始末なぞいたしません」

激しい平手打ちが、その返答であつた。

「お黙り。あたしは、お前を折檻しなければ許してやらないよ。さあ、立ちなさい。そして、おとなしくお尻をこっちに向けなさい」

彼女はムチの柄をつかんで、若い娘のスカートをからげさせ、左の腕で娘の体を抱え込んで、片膝に娘の腹をぐっと押しつけ、うまい具合に娘の尻を露出させて右手で叩きはじめた。その叩き方がじつに巧妙なので、娘の新鮮なバラ色の尻は、みるみる、打ち傷でいっぱいになってしまう。



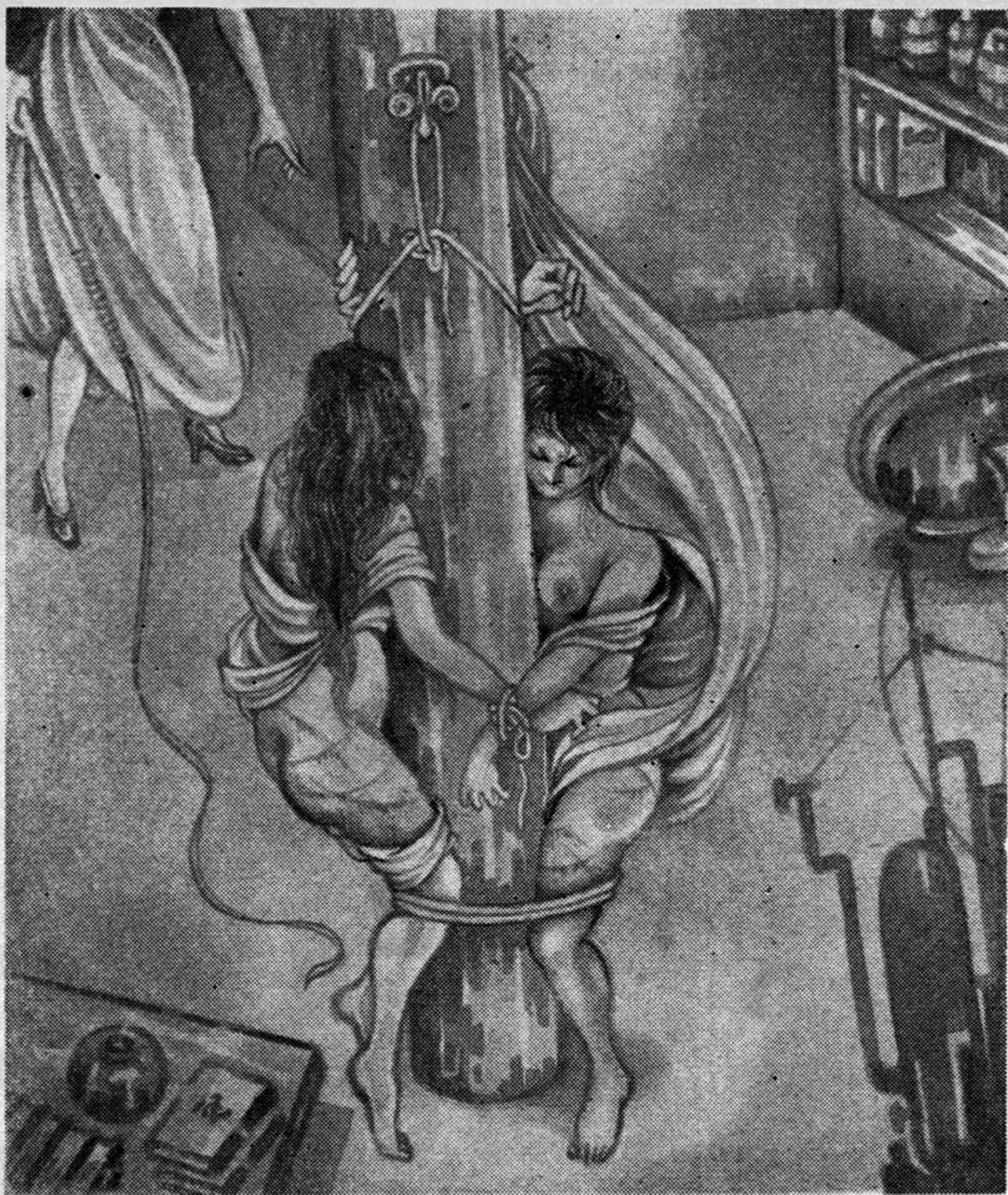
一方、広間のほうでは――

司祭という四十ばかりの男が天井から髪の毛によって吊るされた、たいそう美しい十五歳ぐらいの娘を相手にしていた。その方法は、娘の白い肌を、針でぶつぶつ突き刺すので、身体じゅうから血がしたたり落ちていた。しかも彼は、ジュリエットの尻に噛みつきながら、もう一人の女を抱いているといった具合。

二番目の男は、二十歳ばかりの美人の乳房と顔に鞭打を与えて満足している。

三番目の男は、犠牲者を片足づりに吊るしている。犠牲者は十八歳ぐらいで、見事な肉体の持ち主であるが、こんな具合につるされて、女のいのちの個所をむき出しにされ、鉄のトゲのある棒でいじめられている。

四番目の男は、まだ十二歳ぐらいの少女を焼き網に縛りつけ、暖炉の炭火であぶっている。
まさに悪徳の快楽である。



ジュリエットもまた、これら好色漢たちの相手をさせられる。

彼女の入った部屋は、たった一つのランプに照らされた、二間四方ぐらいの部屋で、真っ黒に塗られていた。右側には、蒸溜器だの、炉だの、そのほか化学器具が、ごたごた並べてあり、左側には、貯蔵ビンなどのった棚や、書物を並べたテーブルなどがある。

正面には、黒い垂れ幕が、別室とのあいだを仕切り、中央に黒ビロードのついた木の柱が一本立っていた。この柱に、ジュリエットと、もう一人の若い女が、向き合わせに縛りつけられる。そして、五十回ぐらい、はげしい鞭打を受けた。ムチは青々とした生木の枝ムチで、二人ともたちまち血だらけになってしまう。

だが、この攻撃は、次に、皮の房のついたムチに変わり、なおもつつけられる。二人の女の手も、足も、溢れる血潮で濡れる。

まさに悪徳の繁栄である！

戦後、"第二の都心"
として発展の途をたど

(1)



町の野獣たち

川 島 勇 男
江 馬 美 久・え

新宿は、きょうも夜空に、まばゆく、五色のネオンサインをきらめかせている。

ことに土曜日のこととて、道路という道路は、人の流れであふれていた。あるものは酒気をおびて高声で歌いながら、あるものはひっそりと手を組んで歩く……とにかく、あらゆる人種が、それぞれのスケジュールで、土曜日の夜を楽しんでいるようだった。

だが、こうした、にぎやかに明け暮れる盛り場はまた、悪の温床でもあるのだ。新宿とてその例外ではない。淀橋、四谷の二つの警察署が、たえず肅清をするのだが、追えば逃げ、またすぐに戻



ってくるのが、こうした町に巢食うグレン隊の常だった。

彼らは、手をかえ品をかえて、自分たちの欲望を満たそうという習性をもっている。だから、表面、いかにもはなやかな夜の盛り場には、必ず、あやしげな悪の花が、いろいろな形で咲き乱れている。いわく暴力、いわく売春、いわく恐喝、いわく傷害殺人等々である。

(2)

高須宏一と安東咲江は、この秋の十月に、結婚式を挙げることになっていた。だから、婚約者の常として、彼らもまた、若い血潮にかられて、土曜日の夜を、アベックで楽しむために、新宿へ出てきた。宏一は、中央線で帰るのだし、咲江は、小田急沿線に家があったからである。

その日——八月も末の、だが暑さのきびしい夜だった。宏一と咲江は、冷房のきいた映画館で映画を見て、さてこれ

から、ど

こか静かな喫茶店で、ひとときを語ろうと、肩を並べて歩いていた。

「いて、いててッ！ やい、なにをしやがんでえ」

いきなり肩をつかまれて、宏一はびっくりした。

「やいやい、ひとの足を踏んづけやがって、あいさつもしねえのかよ」

見ると、宏一の目の前に、一目でグレン隊とわかる男が、片足を押えて立っている。

宏一には覚えのないことだった。いくら咲江と話しながら歩いていたとはいえ、他人の足をふめば、わかるはずである。だが、なにしろ相手が悪い。あやまるにしかずである。

とっさに心を決めた宏一は、

「いやすまんでした。つい、人ごみに押されたもので……」

「なにイ、人に押された？ 人に押されたからオレの足をふんでもかまわねえっていうのかい」

「いや、そうじゃない。悪かった。勘弁してもらいたい」

「おう、ケン、どうしたんだ？」

うしろから声がとんできた。宏一がふりむくと、彼らのまわりには、いつのまにか五、六人のグレン隊がかこんでいるではないか。あきらかに、計画的なインネンつけである。

宏一は、悪いことになったと思ったが、こ





ここで争っ
ては損

だと、あくまでも下手に出た。

「いや、悪かった。コウヤク代を出すから、
勘弁してもらいたい」

「なに、コウヤク代？ オレたちは、タカリ
じゃねえんだぞ、甘く見るねえ」

いよいよ事態は悪い。通行人がた

かってきた。

「おい、ニイさん、ちょっと顔をかせやい。
こう人だかりがしたんじゃ、話もできねえか
らな。そっちのネエちゃんも一緒だ」

いやも応もない、二人をまん中にして、彼
らは歩き出した。

(3)

宏一と咲江が、五、六人のグレン隊に連れこまれたのは、すぐ裏通りにあるバーの地下室だった。そこまでくると、彼らの態度が、

俄然、凶悪さをむき出しにした。

「おい、オレたちや、ジエクのS組のもんだぜ、トウシロウにイチャモンつけられて、黙っているわけにゃいかねんだぜ」
「だから、さっきから、あやまっているじゃ

ないか」

「なに！ つべこべいうねえ」

さっと男の足がのびて、宏一の足を払った。不意をつかれた宏一は、その場にドンと尻もちをついた。ほかのものが、よってたかって宏一を縛りあげたのは、あっ！

という間の、一瞬の出来事だった。

「可愛がらせてもらうぜ」

兄イ株の男が、うしろから咲江の首に腕を回した。

「イヤッー イヤッー やめて……」

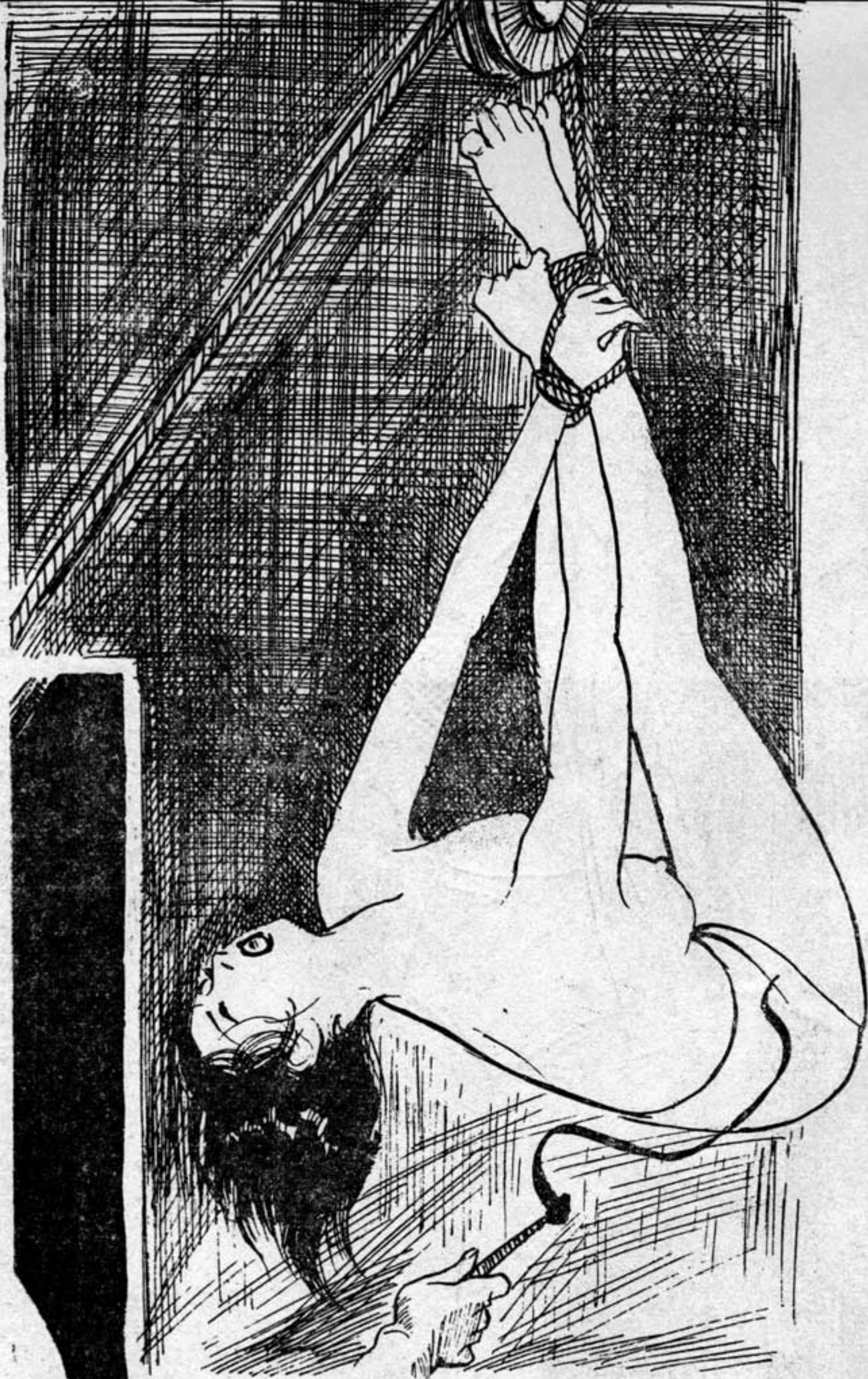
彼女の声はむなしかった。

「おい、つるせ」

兄イの命令で、咲江は、部屋の隅にあった木組みに、両手をつられた。鉄の輪が二つ、そこへ手を差し込んでつるような仕掛けになっていたのだ。

「ネエちゃん、いい肌をしてるじゃないかよ」

兄イの手が、サッ！と、咲江のス



カートをむきとった。ブラウスのボタンを
引きちぎった。

「イヤ！ 堪忍して……」

だが、身動きできない彼女としては、恋
しい宏一の目の前で、むき出された肌をお
おうすべもなかった。

その肌に、細身のナイフが、ひらめく。

(4)

彼らは、はじめから、咲江を痛めつける
つもりで、計画していた。この地下室には、
そういった仕掛けが、いくつもあった。

手首と足首を一つに縛って滑車かっしゃでつりあ
げられた咲江は、パンティー一枚の裸身に
むかれていた。

その肌にムチが鳴った。

ピシッ！

「ヒューッ！」

ピシリというムチの音と、咲江の悲鳴が
交錯した。宏一は目をつぶったが、縛られ
ている身に、目を覆うことはできない。

あくる日の夜明け、新宿から遠くない代
木の原に、息もたえだえの咲江と宏一
が、全身にムチのあとを赤くはらして、こ
ろがされていた。



——豊満な肉体に加えられた残虐——

アラン・ストーン



人質にされた金髪美女

彼女の名はヒルディカール。いまは、敵つまりイギリス兵のアダムス少佐にとらえられ、サルグツワをかまされて、納屋の二階で人質にされている。

時は一九四四年六月一日、第二次世界大戦も終わりに近く、戦線のどこでも、激闘がつづけられていた。

アダムス少佐は、二日前の夜、特別命令を受けてサリから飛び立ったのだが、乗機のランカスター爆撃機がライン河上空を飛んだとき、故障を起こして、不時着したのだった。

その方向のナチスの警戒は厳重をきわめて、少佐は、身をかくすのに骨を折った。だが、その苦心もむなしく、いま、ナチス兵に追われて、この百姓屋の納

屋に逃げこんだのである。そのとき、ヒルディカールを人質としたのだった。

彼女は、じつは、ドイツ軍のスパイで、連合運への逆スパイとしてもぐり込んでいたのだ。アダムス少佐は、それを見破ったからこそ、人質にしたのだ。

そして、納屋の二階で、彼女を縛りあげてサルグツワをかませ、いろいろと訊問したのだが、彼女もまた、一筋縄でいく女ではなかった。

そこで少佐は、女の羞恥心に訴えて白状させようと、乳房をむき出し、ピストルをつきつけた。だが彼女は、

「殺す前に、何もいらないの？ 本当に、この肉体からだがいるんじゃない？」と、ビクともしなかった。

ちょうどそのとき、ドイツ兵の斥候が三人、彼女の名前をよびながら、さがしにやってくる。

アダムス少佐は、すぐに一計を案じた。そして、ヒルディカールの、カールしている金髪の下に拳銃を当てた。彼女は、4・5ミリ口径の安全弁がはずされる音を、まざまざと聞いた。

「おい、ヤツらに言え。縛られているからここまで上がってきて助けてくれと、ヤツらに言え」

彼女は、そのことばに従った。

「助けてくれ。お願いです、動けません！ その声を聞きつけて、三人のドイツ兵は納屋に駆け込んできた。

ヒルディカールは、アダムスの顔を、媚びをふくんだ目で見上げていった。

「少佐、あたしに気持ちよく、さようならを言ってよ」

だが、そのとき、ドイツ兵は、やっと梯子はし子をさがし出して、乾し草にたてかけた。

一人が昇ってきて、顔を出した。その瞬間、アダムスの指が引き金を引いた。

パツと血がとび散り、ころげ落ちた。

次の一発で、二人目が銃を落として膝をつき、納屋の外に駆け出した三人目は胸を押さえてうずくまった。その指のあいだから、深紅の血があふれた。

あくる朝、ワラの中に、ヒルディカールの死体ごろがっていた。全裸に近い姿で、コメカミに一発至近弾の跡がクッキリとついていた。

地獄の戦士

ジョエル・リッター

そのころ、オーストラリアは、イングランドとアイルランドからの囚人の流刑地であった。彼らは、故郷を追われた寂しさと罪を犯した自棄の念から、すさんだ毎日をおくっていた。

したがって、原住民のオーストラリア人には、鼻つまみの嫌われ者であったと同時に、手に負えない乱暴者とされていた。だから、いつも、さわらぬ神にタタリなしのたとえどおり、彼らの横暴にも、目をつむって耐えていたのだった。

だが、原住民のうちにも、反骨の心に燃えているものも少なくなかった。その代表的なものは、パンターにひきいられる一群の山賊どもであった。

彼らは、オノルアベイの山にたてこもり、流れもののイングランド人やアイルランド人に反抗した。

彼らのほとんどが、そういった荒くれ者どもに、わずかな畑地を追われて、食うに困った連中であつた。妻子を殺されたものもいたし、えいえいとして築きあげた全財産を、ワラ一本残さず取り上げられたものもいた。

だから、彼らの、流れものに対する憎悪は、すさまじいものであつた。

もちろん、流れものたちは、集団となつて、これら原住民の抵抗に対抗した。しかも彼らは、警備という名目のもとに、拳銃が与えられ、交替でその任につくことになっていった。

彼らは、これを奇貨とし、たくみに利用することを考えた。つまり、彼らに敵対する原住民たちを、暴徒の名のもとに、捕えて首をはねてしまった。

それも、すぐ殺すのではなく、捕えた男

は、立ち木にしばりつけ、まずムチの雨を降らすのだ。皮膚が破れ、肉が切れて、りんりと血が流れ落ちる凄惨な場面を前にして、酒盛りさえひらくのだった。

あるものは、太い木の枝にさかさ吊りにされたまま息を引きとった。カラスが、その死肉をついばみ、ウジがからだじゅうをはい回った。だが、その最後の肉の一片がなくなるまで、そのまま捨てておかれた。

原住民の女が捕えられてきたときのことだった。彼女は臨月に近く、大きなお腹をしていた。立ち木に縛られたまま一夜を過ごさせられたが、夜が明けてみると、彼女の腹はたち割られ、胎児がその足もとにころがされていた。それは一塊の肉塊だったが、よく見ると赤ん坊の形をしていた。

こういった暴挙が重なるにつれ、原住民たち、ことにパンターのひきいる山賊どもは、報復的に、流れものたちを襲った。一人か二人で外出すると、どこからかそれを見張っているのだろう、たちまちパンターの一味に襲われた。

目には目を、歯には歯のタトエのとおりパンター一味が加える残虐も、目を覆うば

かりであった。

こんな状態だったから、オーストラリア
一円——といっても、イングラント人やア
イルランド人の住みついた地域だけだが、
そこには、いつも一触即発の危機がみなぎ
り、不穏な空気が流れていた。

だが、原始的な刀ややりでは、とうてい

文明的な銃にかなうはずはなかった。三、
四人の流れものを襲ったパンターの一味
は、不意に後方から包囲されてしまった。
つまり、オトリをつかってのおびき出しの
ワナにかかったのだった。

激闘は一時間にわたってつづいた。だが、
しよせんは銃と刀、しかも人数もパンター

側は敵の半分にも満たなかった。勝敗の数
はおのずから分明であった。

ついにパンターがたおされた。一度に殺
到した流れものがその首をハネたとき、サ
ッととび込んだ一人の若者が、その首を奪
いとるや、馬を駆って一散に逃げた。
やがて、夕日が赤々と沈んでいった。



野盗と女たち

山際正之 小田利美・え



利

1

「頭、きょうのは上玉ですな」

「うん、なかなかの絶品じゃ」

「酒盛りが、一段とうまいことでしょうな」

「ウハハハハハ」

男たちは、一目でそれと知れる野盗のたぐい。人相悪く、誰の目にも凶暴な光がぎらついている。今しも、一人の男に挑まれた若

い娘ふたり。
ひとり、首に腕を巻かれて、胸もとも乱れ、乳房がこぼれている。ひとり、逃げようとしたところを、うしろから帯の結び目をつかまれたのだから、とけなかった帯をひっぱられて、手もとへたぐりよせられようとしている。
しよせんは、タカにねらわれた小スズメ。逃げおこせるものでない。山寨へ連れていかれて、なぐさみものにされるのがオチであろう。
時は大阪夏冬の陣が終わり、ようやく徳川幕府の勢威が全国を覆おうとしていた。だが、世に入れられない浪人どもが、禄を離れて、ウヨウヨしていた。彼らは徒党を組み、危険な山寨などによって蟠居していた。そして、罪とがもない良民の家



を襲ったり、通りがかりの旅人たちをねらったりした。
いま、その餌食にされようとするふたりの

娘は、江戸への旅を急ぐ道すがら、従者を切られて、凶暴な野盗の手に落ちたのだった。

利

2

「手荒にするなよ」
「おおさ、こんな奇

麗な肌にキズをつけては、楽しみが減るわ」
すでに、恐怖のあまり気を失った娘をひっかきついで、山寨へ急ぐ荒くれ男たちの目は、なにかを期待する光にギラついていた。
彼らの凶暴な血は、女を犯すだ



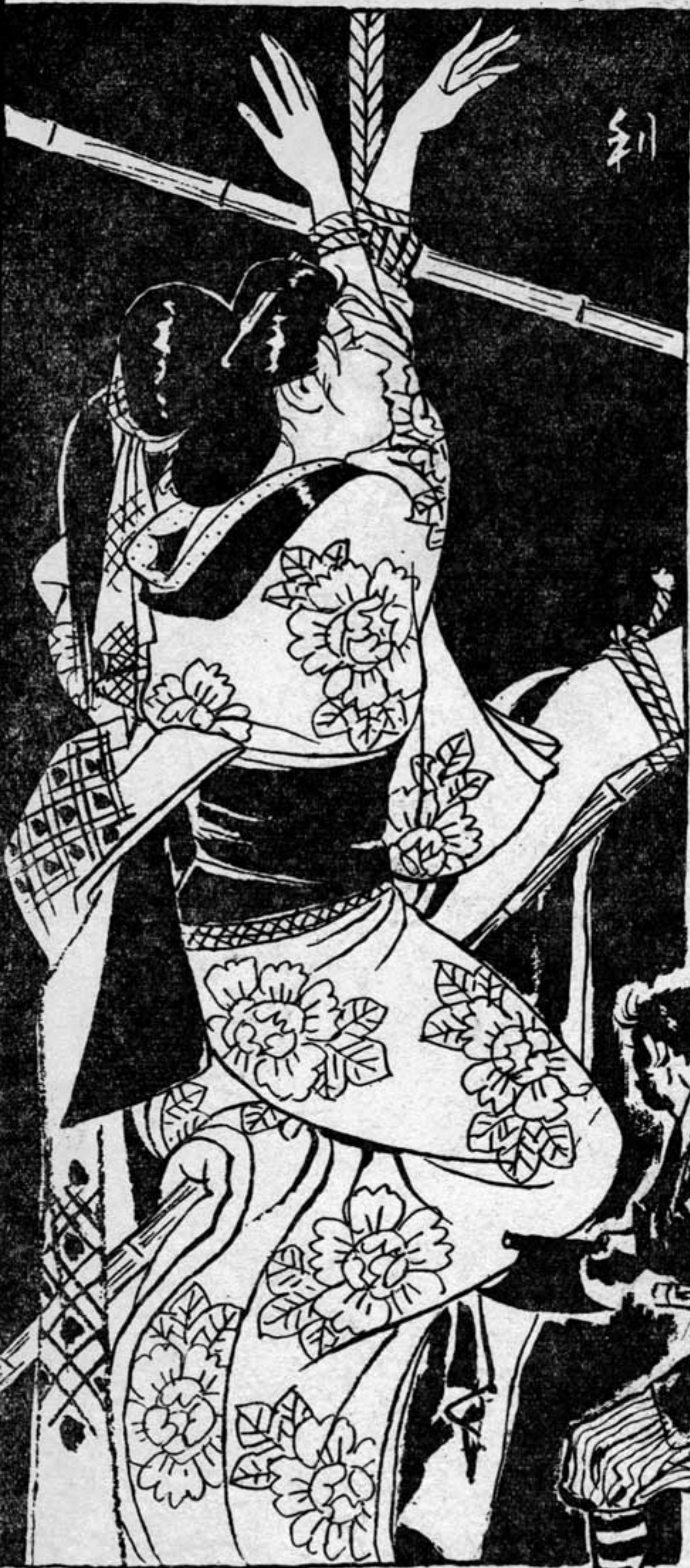
けでは満足していないのだ。

女に、それほど飢えてもいないせいもある。出かければ、どこにでも、金と女がころがっていたからだ。

だから、山寨に連れこまれた女は、太い梁につり下げられた。そして、切ってきた木の枝の、それも葉をつけたままの枝でムチ打たれるのだった。

つるされて、打たれて、身もだえし、悲鳴をあげる女が、彼らの欲情を燃えたたせ、荒びた血を湧きあがらせるのだ。

さらってきた女を責めさいなみ、けっきょ



くは、情欲のはけ口となるのだが、そのまえに、手を尽くして拷問にかけるのだ。そこに彼らは、世に入れられない不満を満たそうというのだろう。女たちは、ただ、そのいけにえとしての運命に泣くのだ。手向かおうにもムダなことだ。

野盗どもは
えものの女に
考えつく限り
の責めを加え
た。それだけ
が、彼らの生

3



き甲斐だともいうように、残虐
をきわめ、手段を尽くした。
女の羞恥心を知り尽くした男ど
もである。白い肌へのそれは、若
い娘たちにとって、堪えがたいも
のがあった。

乳房をもてあそぶばかりか、女
のいのちともいうべきところ、親
にも見せない恥ずかしいところを
露出させて、言語に絶する玩
弄が行なわれた。

まだ男を知らない玉の
ような白肌に、ロ
ーソクの火が迫り
黒々と燃いた。恥
部の毛さえ、その
炎をのがれるすべ
はなかった。

刀におどかされ
てハダカおどり
を強いられる娘
もあった。柔肌
をむき出しにつ
り下げられて男
の手でまさぐら



利

れる女もあった。

酒に酔い、いよいよ凶暴の血をかりたてられた野盗たちにとって、これほど満足のいくデカダンスな行為はないようだった。

柱にくくりつけられ、あられもな

く肌をむかれた、その白い肌

に、短刀の鋭い切っ先が

文字を書き、卑猥

な絵を描

くことさえもあった。

女は悲鳴をあげる、身をよじって、その切っ先をはずそうとする。

だが、身をもがけば、肌につけられたキズ口から、よけい血があふれ出る。

ほとんど全身を血に染めてころげまわる女

をみて、野盗どもの目は、

さらに残忍の色を濃くする

のだ。

凌辱は、言語に絶した。

血のしたたる女の肌を抱き

ながら、その血をすすするような、さながら地獄図絵を、来る日も来る日もくり返されるのだった。

戦国の世の片隅で、人知れず行なわれた残酷の絵巻！



利



妖美凄絶の迫真緊縛写真数十葉と、悦虐名画数十点を一堂に会した、豪華絢爛の、目で見る変態風俗絵巻。



画報・風俗奇譚① (一八〇円)

多色刷口絵・庭園の妖魚
グラビア口絵・裸女哀歓ほか百数
十葉の妖美凄絶の迫真緊縛写真
土居啓子無残画帳
小田利美責め絵アルバム
変態猟奇名画集
世界怪奇無残譚
残酷なる女たち
東西快樂の入浴風景
写真ストーリー・ケダモノの夜
絵物語・恋慕執念
鞭打つ女性たち
ドミナ・赤い悪魔・ヴィナス
奇妙な体験ほか



画報・風俗奇譚② (一八〇円)

第1グラビア・鴨居づり他
第2グラビア・美囚六態他
第3グラビア・犬になれ他
百数十葉の緊縛特写真写真満載
多色口絵・池畔の愉悅
写真口絵・陶醉する女体
マゾヒスチック絵画館
アブノーマル秘画展
写真物語・偏奇狂奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
惨憺目を覆う殺人現場
人間ステッキほか



画報・風俗奇譚・秘蔵版 (二〇〇円)

多色刷写真・まひるの艶肌ほか迫
力緊縛による豪華版
多色刷口絵・空中はりつけ、白肌
の執念ほか
色彩図譜
第1グラビア・二人無残ほか
第2グラビア・竹で責めるほか
第3グラビア・異虐図絵ほか
責め絵画集・三人力作集
アブチック絵画館
コルセットをする女たち
男をしいたげる女たち
ザッヘル・マゾッホのほか
小説・永遠の美と若さの泉

既刊各号の残部が残り少なくなりました。バック・ナンバーの御注文はお早くお申し込みください。

創刊・臨時特集号 (売切れ)

艶妖特集号 (二〇〇円)

多色刷写真口絵多数

特集・サディズムの種々相

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の変態心理

白肌を切り裂く男の愛情

回教残酷譚

女の黒髪に埋もれて死にたい

犬によって快楽を求める女他

悦虐特集四月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア口絵豊富

特集・鞭打の心理と実相

焼け火箸の快楽死

人間と蛇との交情

女の死体に憑かれた男

地獄尼僧院

ピストルを持ったサディスト

変態名画館——ほか

春の臨時増刊号 (二五〇円)

(妖異猟奇艶笑特選25編)

特写グラビア精巧写真口絵

変態性欲考

猫の怨霊

若い女の生胆をとる老婆

会員三百人の男色クラブ

魔の十三号室

吸血鬼譚——ほか

耽美法悦特集五月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア多数

特集・同性愛の種類と実際

マゾッホの被虐待契約書

女の切腹とその心理

女の人肉を食べた男

性的イレズミ考

マゾヒストの美酒

ベルトの魅惑——ほか

嗜虐陶酔特集六月号 (二二〇円)

多色口絵グラビア16頁ほか

特集・フェチズム(淫物症)

マゾヒストの手紙から

浣腸に魅入られた女

マゾ妻「二代目矢作ヨネ」

八十七個の洗濯バサミ

レスボスの日

変態見世物——ほか

夏の臨時増刊・薫風特別号 (一八〇円)

多色刷特写真口絵・無残石燈

グラビア・荒縄と岩、首つり

とくすぐりをはじめ百数十

葉におよぶ凄絶緊縛写真は

愛好家待望のコレクション

特集・怪奇残酷秘話

十代の悪の女王

白肌責め絵図

肉体壁面を彫る男

男性チョン切り事件史

尼僧強姦魔・大米竜雲

マツチの火で毛を焼いて

サド男マゾ女の無理心中

写真物語責め写真家とモデル

絵物語・無法狼、娘しぼり

そのほか変態性欲犯罪実録集

怨羞無残特集七月号 (二四〇円)

多色口絵II落花図絵・女のプ

リズムほか

グラビアII恋慕受縛・姐上の

白魚・吊られる女ほか数十葉

特集・食人症

サディズムの極「食人症」

食人国物語

人肉料理を食べた人びと

幻妖異虐特集八月号 (二四〇円)

多色刷口絵・緊縛二重奏

グラビア・スタン드의美女、

竹責め・男性緊縛ほか数十葉

口絵・江馬美久傑作集

特集・レスビアンの生態

サディストとマゾヒストの往

復書簡

東西レスビアンズの愛の技法

美少年の家探訪記

あたしの悦虐プレイ

殺した女の怨霊に招かれた男

亡霊に復讐された男女ほか

艶美悶悦特集九月号 (二四〇円)

多色口絵・空中鞭打

写真原色・巖頭の裸女・つるさ

れた白魚・女をポーズほかグ

ラビア・裸女無残・二人しば

り・投げ出された女ほか数十

葉

特集女装する男たち

女性的男子について

女装する男たちの生態

女装マニアその魅せられるも

の

浣腸のいけにえ

マゾヒストの手紙から

奇妙な再会

暗黒街の処刑室ほか

原稿募集

創刊以来本誌では毎号読者のみなさまに投稿原稿を御依頼してききましたが、いよいよ10月号を期して画期的な原稿募集を企画決定しました。

つきましては、全国のファンのみなさまよりの力作、傑作をふるって御投稿くださるようお願いいたします。

応募規程

◎告白、体験記（四百字詰） 20枚

◎アブ創作（四百字詰） 30枚

サディズム・マゾヒズム・ホモ・フェチズム・浣腸・切腹・男性緊縛等、異色の世界をえぐる小説を期待します。

風俗資料

お手もちの変態風俗資料を御送りください。買い取り、拝借どちらでも結構です。

読者写真

採用の節は規程の稿料を差し上げます。

編集だより

▼柱背負いの村山ユミ、18才、フリー、野上由子さんを姉のように慕い最近風奇の専属モデルになった大変おとなしい娘さん。まだまだ大胆なポーズはとれないが、いずれあったといわせるような緊縛感をもって登場します。

▼九月号から新人として登場した女のポーズの渾美圭子、21才、フリー、豊満なポリニームは今までにない嗜虐感を与える。

▼十月号からあらたに登場する三原はるみ、戸川加代の新人モデルが熱海―伊東のコースで撮影し新鮮な姿態で読者のみなさんにお目見えいたします。

以上が風奇専属モデルのあらまですが、お手紙に対しては直接モデルより御返事をさし上げますからふるって御便り下さい。

▼連日32度を越す猛暑の最中、この画報④を読者のみなさんにお届けすることになりましたが、いか

本誌月ぎめ御購読のお知らせ

普通号

一月分(1冊)	一四〇円送共
三月分(3冊)	四二〇円送共
六月分(6冊)	八〇〇円送共
一年分(12冊)	一、六〇〇円送共

画報・風俗奇譚

一月分(1冊)	一八〇円送共
三月分(3冊)	五四〇円送共
六月分(6冊)	一、〇五〇円送共
半年分(12冊)	二、〇〇〇円送共

愛読者のみなさまにお願い

いままでお買い求めいただいておりました特価本書店のうちに、画報の④ならびに10月号からは配本されない書店があります。と申しますのはその号から、全国の一般新刊書取扱いの書店でいっせい発売されることになったからです。つきましては、今まで古本屋、特価本屋さんなどでお買い求めの皆さまは、画報の④、10月号よりお近くの新聞書店にてお求めください。

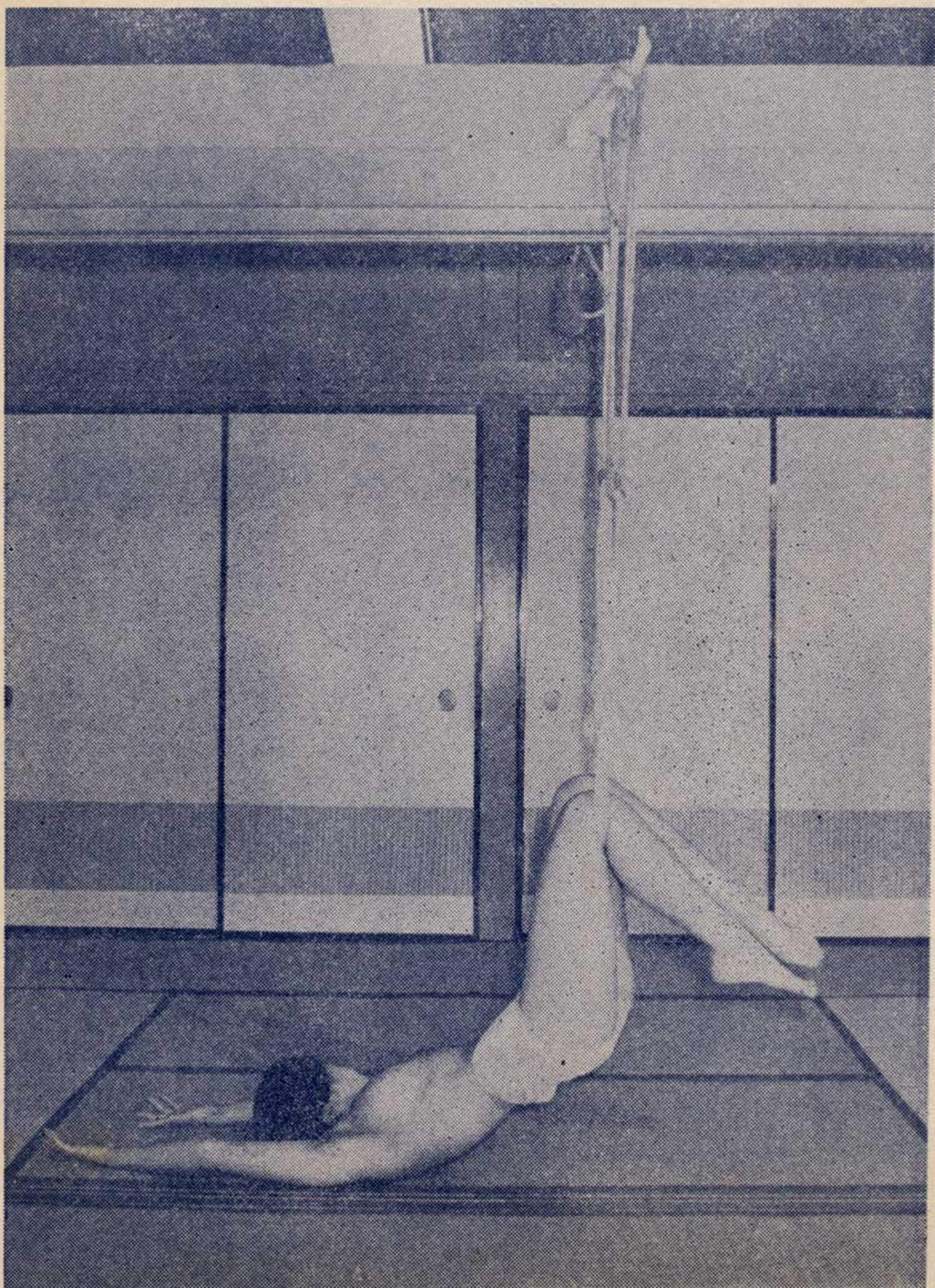
がでしょうか。涼風をよぶ水車責才、フリー、もちろん未婚です。めの写真などはきつと御期待にこたえたことと思います。

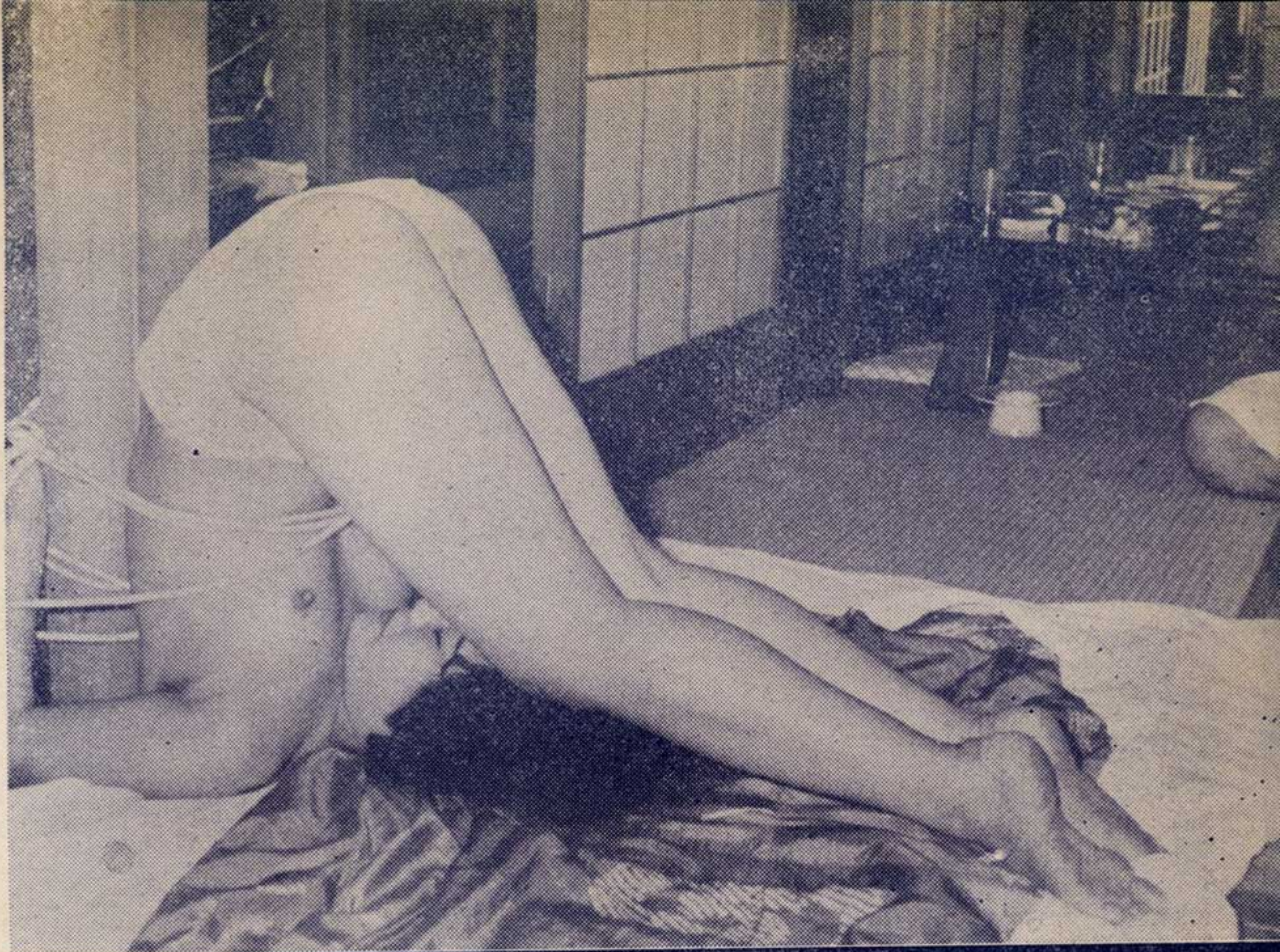
▼読者のみなさんから毎号風奇のグラビアに登場するモデルの名前、年令、住所、趣味、既婚か未婚かなどと御手紙がまいりますのでお知らせしました。

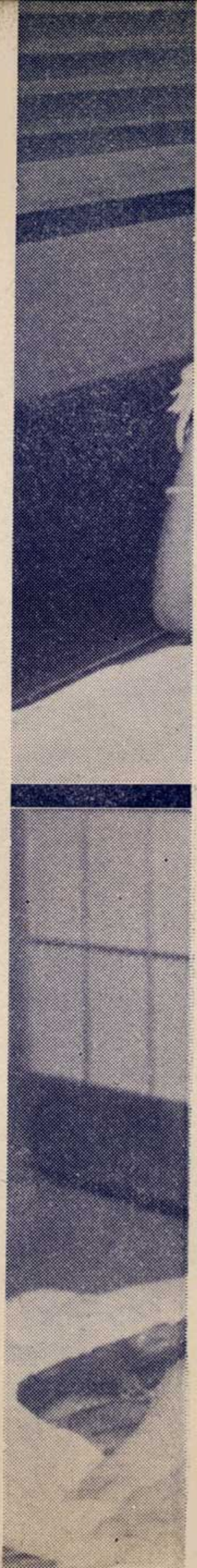
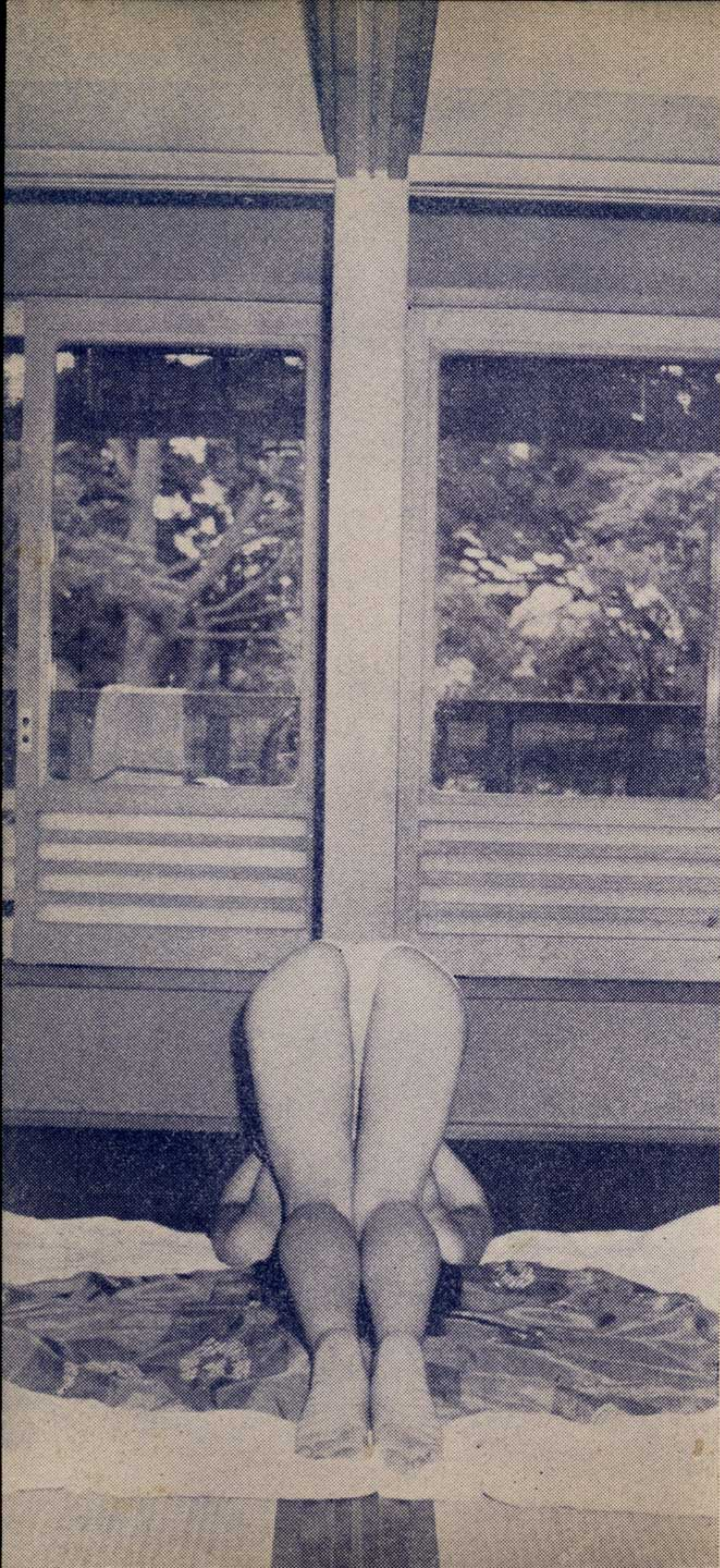
秘蔵版掲載モデル
▼まひる艶肌をはじめ毎号レギニラーとして登場する野上由子。21

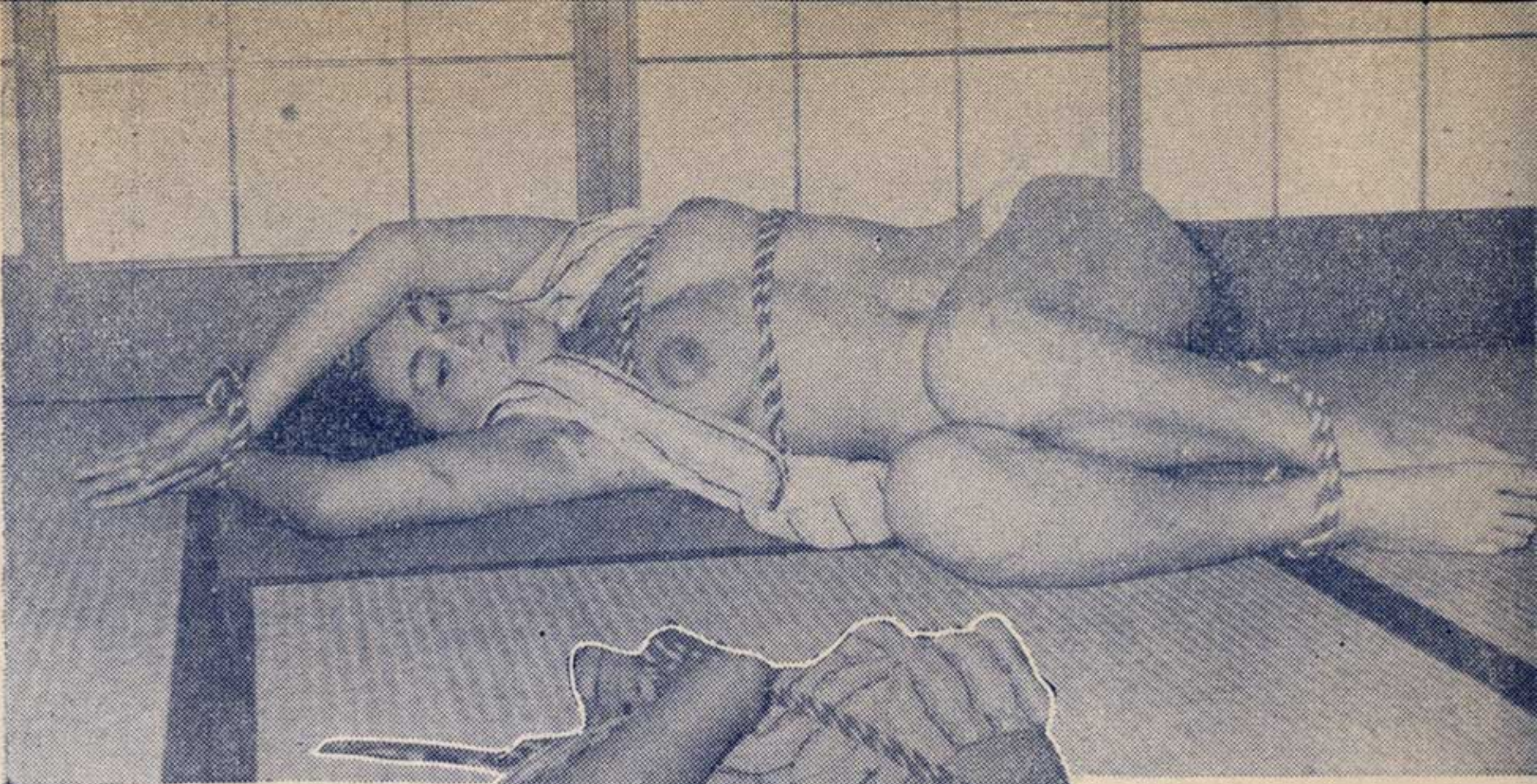
▼海の見える景色のよい場所、奔放な責め写真を撮ってくれという読者からの注文に気をよくしてか八月九、十日は伊豆山行と決まった。乞御期待と行こう。

裸女緊縛30態









へビのように まといつく縄

この不自由な世界の なんと妖しい魅力よ

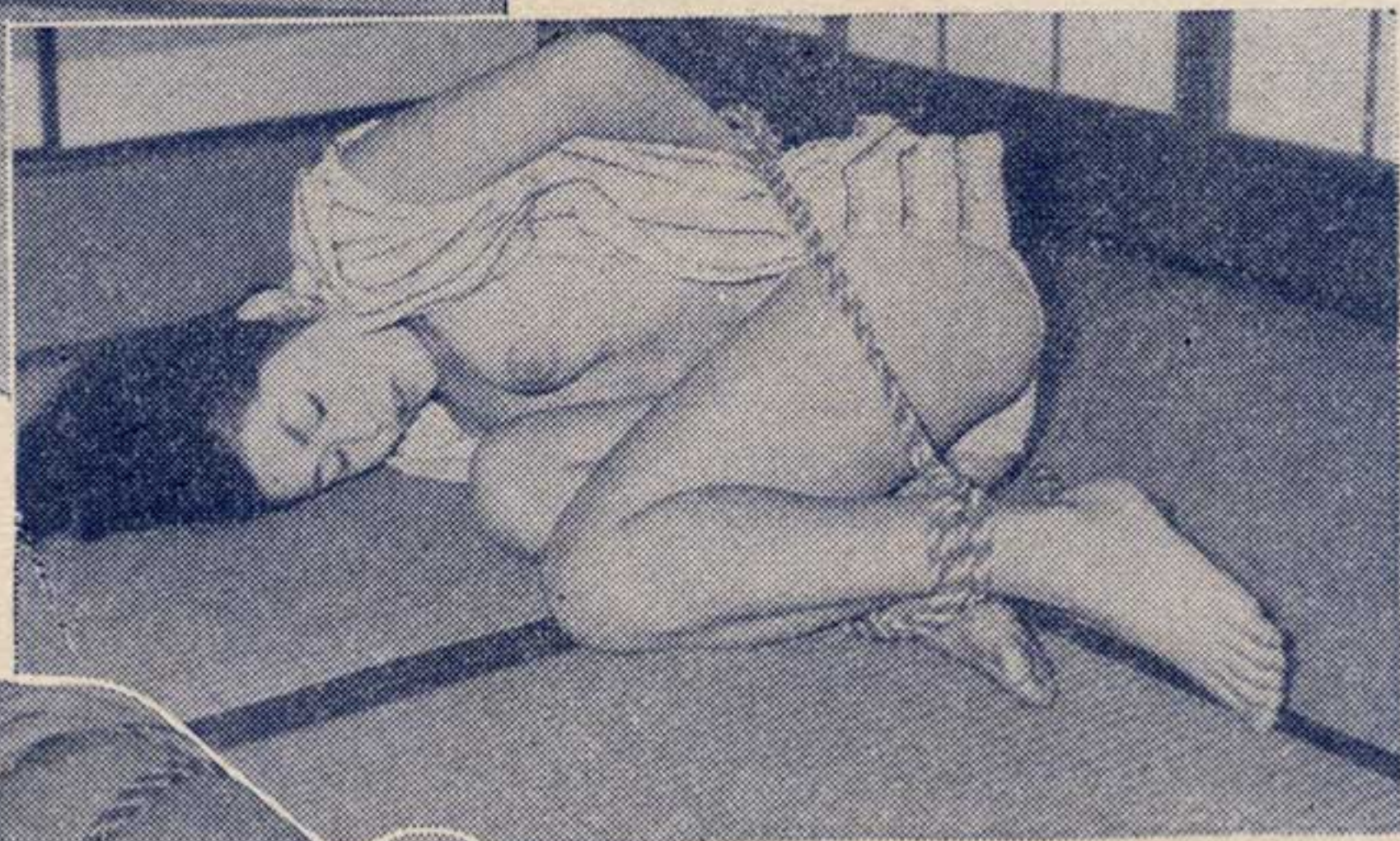
陶酔と 法悦と 歓喜と

そして えも言われない甘美な桃源境よ

ああ すべてを忘れ すべてを捨てさり

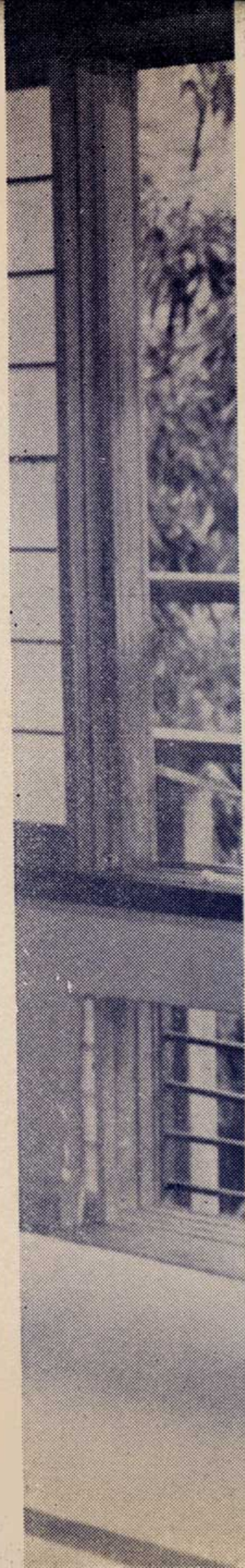
このひとときを 心ゆくまで噛みしめよう

忘我恍惚の 女の美しい姿態よ



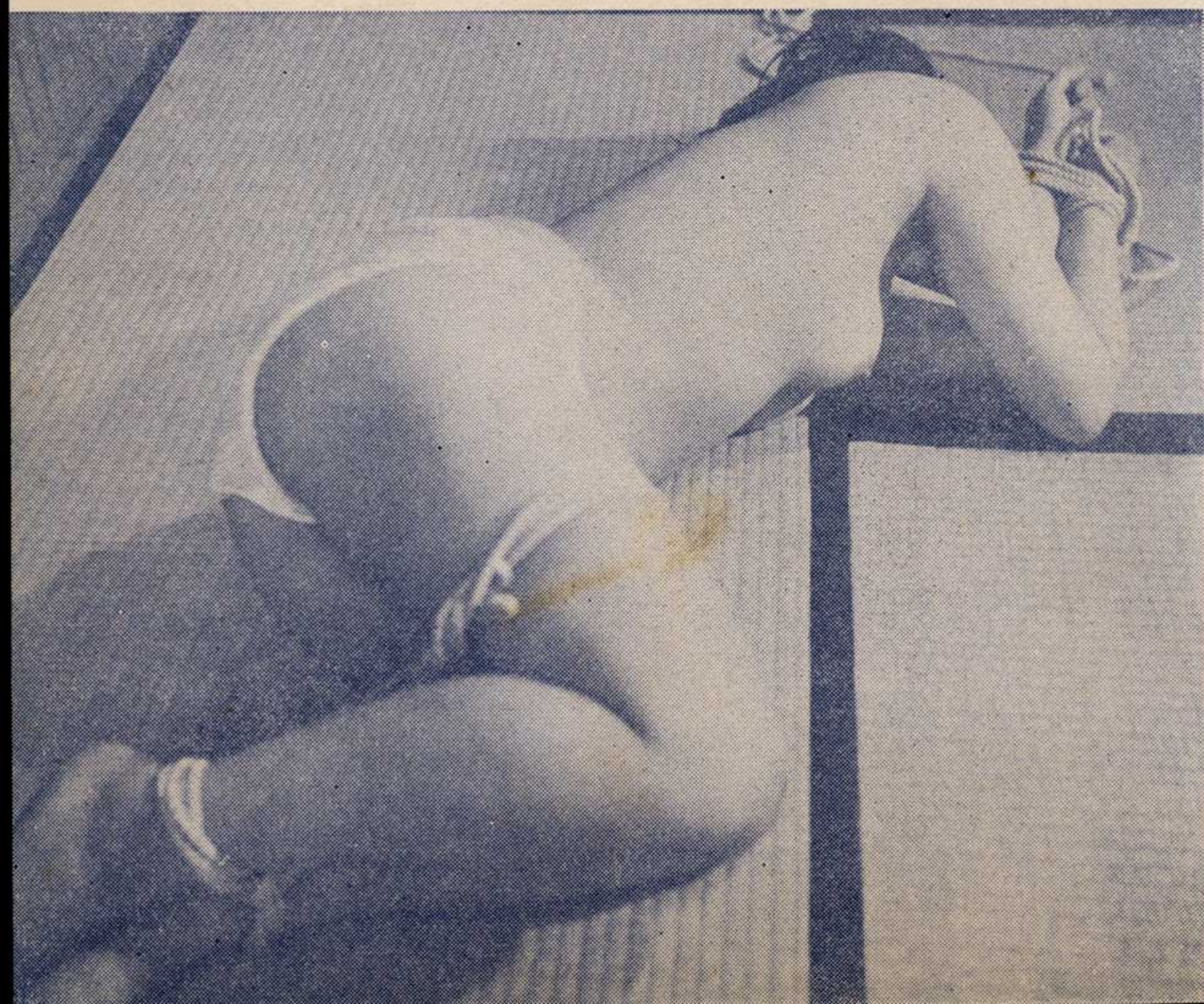


山も 谷も 木も 草も
みんな静まりかえっている
そんな平和な雰囲気でも
この部屋だけは 別天地
肌もあらわな若い女が
手すりにくくられ
身もだえしている
荒々しさと 静けさと
この対比のなかに
異妖な空気が流れ
これから 無残な絵巻きが
くり展げられることだろう
そのひととき前の
無気味な沈黙！



身内を　するどく貫いた　異様な感覚は　苦痛と喜悦の両極端の
錯綜した電流を　流した　しびれたからだを　投げ出して　そのあ
との　甘い情緒にひたるとき　女は　限らない幸福を　噛みしめる







いったい どうしたのか
長椅子に 身を投げた女は
力のまえに 打ちひしがれ
もう 抵抗する気力も ない
落花狼藉寸前という状態で
あきらめきって
次のお仕置きを 待っている
ムチがふるわれるのか
それとも 縄で縛られるのか
あるいは
もっと残酷な物語が
これから はじまるのか
いずれにしても
ただ待つことしか
彼女には 残されていないよ
うだ





水辺の小屋に ひとりの女
しばられて 水にひたされて
縄は 乳房を巻き



サルグツワは 呼吸をせきとめ
 しかも 水は そくそくと 全身を冷やす
 とらわれのポーズの
 ああ 痛ましき





手と足をうしろで縛られ 板敷きに押しつけた乳房が キリキリと 疼痛を からだに射し通す





板の間に ころがされた女は 水揚げされた魚のように 冷やかだが なまめかしい しかも



ウィンチでつり上げられた荷物のように ぐるぐる巻きの女体が 溜め息をついている

